JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

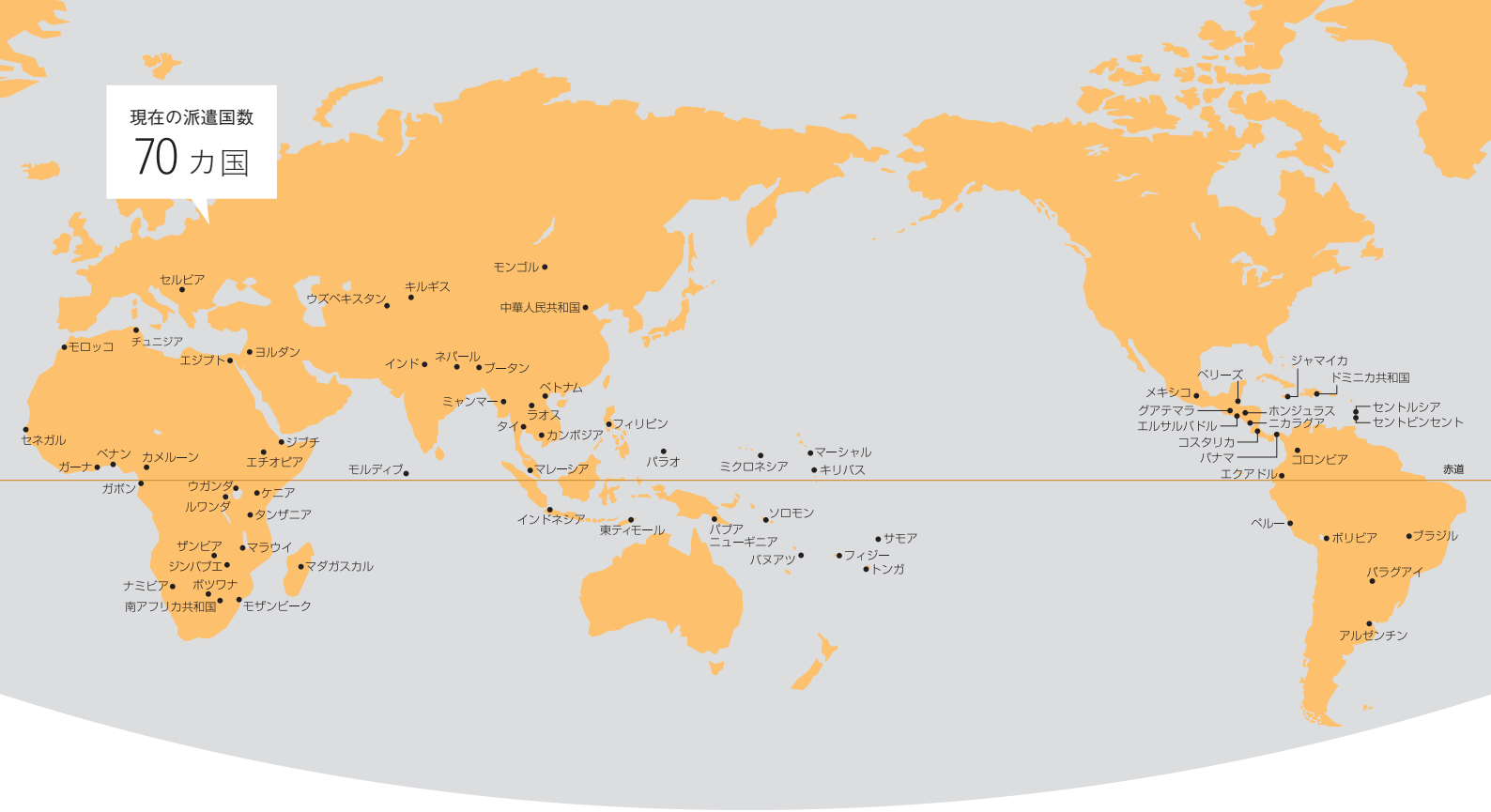
1

2021 JANUARY

特集

コロナ禍による一時帰国を振り返る

派遣国の横顔 ～タイ～



JICA海外協力隊 派遣現況

（2020年11月末現在、単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	7	1
エチオピア	4	
ガーナ	17	
ガボン	1	1
カメルーン	9	
ケニア	9	1
ザンビア	16	2
ジブチ	3	
ジンバブエ	7	
セネガル	15	1
タンザニア	13	1
ナミビア	7	
ベナン	3	
ボツワナ	6	
マダガスカル	5	
マラウイ	1	
南アフリカ共和国	1	1
モザンビーク	12	1
ルワンダ	14	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	10	
インドネシア	3	
ウズベキスタン	12	1
カンボジア	5	1
キルギス	6	
タイ	10	1
中華人民共和国	3	
ネパール	17	3
東ティモール	10	
フィリピン	5	
ブータン	3	1
ベトナム	8	1
マレーシア	3	3
ミャンマー	2	
モルディブ	6	
モンゴル	8	
ラオス	13	

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	1	
サモア	4	
ソロモン	9	
トンガ	6	
バヌアツ	9	
パプアニューギニア	9	1
パラオ	3	
フィジー	5	1
マーシャル	2	1
ミクロネシア	4	

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	2	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	1	
チュニジア	3	
モロッコ	3	
ヨルダン	7	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		9	3	4
エクアドル	8			
エルサルバドル	5			
グアテマラ	8			
コスタリカ	9			
コロンビア	5			
ジャマイカ	6	1		
セントビンセント	2			
セントルシア	2			
ドミニカ共和国	16		3	
ニカラグア	1			
パナマ	2			
パラグアイ	7		2	1
ブラジル			25	4
ベリーズ	4			
ペルー	11	2		
ボリビア	11			
ホンジュラス	8			
メキシコ	1	3		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	448 （205／243）	39 （33／6）	33 （11／22）	9 （5／4）	529 （254／275）
累計 （男性／女性）	45,776 （24,302／21,474）	6,553 （5,298／1,255）	1,542 （597／945）	547 （252／295）	54,418 （30,449／23,969）

一般＝青年海外協力隊／海外協力隊
シニア＝シニア海外協力隊
日系一般＝日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊
日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2021 JAN

Contents

4 **JICA Volunteers' Reports**
▶派遣国の企業を対象に「5S&カイゼン」に関するウェブセミナーを開催（ペルー）
▶ルワンダ・コーヒー栽培のリモート技術支援と、日本でのプロモーション（ルワンダ）

派遣国の横顔
～タイ～

6 **保健・医療**
狩俣美紀さん（作業療法士・2017年度2次隊）

8 **計画・行政**
森見真弓さん（コンピュータ技術・2016年度3次隊）

特集
コロナ禍による一時帰国を振り返る

10 **座談会❶**
小島尚幸さん（日系社会青年ボランティア／ブラジル・野球・2018年度1次隊）
富口由紀子さん（マーシャル・栄養士・2018年度1次隊）
西野尚之さん（タンザニア・障害児・者支援・2018年度2次隊）

14 **座談会❷**
道願正歩さん（パナマ・作業療法士・2018年度2次隊）
近藤幸恵さん（カンボジア・看護師・2018年度2次隊）
宮田峻弥さん（ガーナ・小学校教育・2018年度1次隊）

18 **"失敗"から学ぶ**
菅原芽衣さん（セネガル・小学校教育・2017年度3次隊）

20 **希少職種図鑑**
▶珠算　村山 茜さん（トンガ・2017年度2次隊）
▶医療機器　日向泰史さん（ミャンマー・2017年度3次隊）

22 **JICA海外協力隊的プチテクガイド**
改善の方法／任地の素材を生かしたビジネスアイデア

24 **JICA Volunteers' Before ▸ After** ～人生を変えた2年間～
自動車メーカーの海外営業　古西勇太さん（パプアニューギニア・コミュニティ開発・2014年度2次隊）

26 **帰国後よもやま話**
看護師隊員篇

28 **Pick Up OB・OG会**
▶青年海外協力隊岡山県OV会
▶開発教育を考える会

30 **先輩隊員のシューカツ記**
アイ・シー・ネット株式会社 社員　椿原健太郎さん（スーダン・コミュニティ開発・2017年度2次隊）

32 **JOCV SPORTS NEWS**

34 **JICA海外協力隊のつぶやき**
お題：「台所」

35 **INFORMATION**

36 **隊員めし**
新鮮なイカを肝ごと使ったタイ料理「イカとネギの炒め物」

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	4、24、30
コンピュータ技術	8、36
品質管理・生産性向上	4
野球	10
珠算	20
小学校教育	14、18、32
看護師	14、26
作業療法士	6、14
医療機器	21
栄養士	10
障害児・者支援	10

■国別索引

	掲載ページ
ガーナ	14
カンボジア	14
スーダン	30
セネガル	18、32
タイ	6、8、36
タンザニア	10
トンガ	20
パナマ	14
パプアニューギニア	24
ブラジル	10
ペルー	4
マーシャル	10
ミャンマー	21
ルワンダ	4

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
北海道	30
岩手県	18
茨城県	10
群馬県	14
埼玉県	8
東京都	10、21
新潟県	14、20
岡山県	28
高知県	14
福岡県	24、32
長崎県	10
沖縄県	6

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2019年度3次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：（株）AND
レイアウト：（株）AND
印刷・製本：弘報印刷（株）

JICA Volunteers' Reports

JICA海外協力隊とその経験者による国内外での注目の活動をご紹介します。

Peru

派遣国の企業を対象に「5S&カイゼン」に関するウェブセミナーを開催

文 ＝ 松友正志（まつともまさし）さん（シニア海外協力隊／ペルー・品質管理・生産性向上・2019年度2次隊）

開催までの流れ	
〈5カ月前〉一時帰国	ペルーに非常事態宣言が発令されてペルー国内の全移動が禁止になり、自宅待機。その後、一時帰国。
〈4カ月前〉配属先との連絡再開	緊急事態宣言後に、連絡が取れなかった職場の同僚との連絡を再開。
〈3カ月前〉企画	一時帰国中でも行える活動を模索。ウェブセミナーを計画する。
〈2カ月前〉内容精査	ウェブセミナーの実施方法、内容、期間など企画内容の精査を行う。
〈1カ月前〉関係部門調整	配属先の生産省と各地商工会議所との間で詳細調整を行う。
セミナー第1期	8月17日～10月1日に計14回開催。
セミナー第2期	10月26日～12月10日に計14回開催。

一時帰国前に、ペルーの同僚たちと会議後に撮影したもの

2019年12月にペルーに派遣されましたが、20年3月上旬にペルー国内に非常事態宣言が発令され、3月下旬に一時帰国となりました。帰国後の4月上旬から私の配属先である生産省と活動についての連絡を再開し、オンライン会議システムを使用した会議を週1回の定例会議として行うことになりました。当初は一時帰国期間は6カ月程度を想定していたので、4～10月までの活動と、再赴任後の活動計画を作成しました。内容は、ペルー中小零細企業への「改善セミナー」をネット上で実施すること。回数は、2カ月に1度、6カ月間で3回のセミナーとしました。

しかし、すぐにいくつかの問題に直面します。まずは日本とペルーとの時差が14時間あることです。お互いに利用できる時間は1～1.5時間で、この時間では表面的な内容しか紹介できません。次の問題は、受講企業の方々は現在大変に厳しい経済状況にあって、一般常識レベルの講習を受けている時間がないこと。最後はネット利用のセミナーの新しい試みであったため、興味を持ってくれる企業が少なかったことです。

セミナー画面ではペルーの人たちに日本の風景を紹介しようと背景に日本の桜を採用した

これらの問題は、配属先の同僚が各都市商工会議所との打ち合わせを何回も熱心に行い、最終的に次の内容で実施することで解決しました。それは、フル企画のセミナーで、実務的な改善手法の大部分をカバーし、かつグループ別ワークショップ、成果発表、演習などを含んだ内容にすること。また、短時間で効率良く行うため、無料通話アプリを併用した同時通訳を用意し、各回1～1.5時間で週2回、計14回の開催としました。

第1期は、計14回の全セッションを無事終了。主催者側として嬉しかったのはグループ別の発表が素晴らしかったことです。内容を正しく理解し、自社への応用を真剣に考えてまとめてくださいました。また、同僚も今回の新しい試みに果敢に挑戦してくれました。50人という多くの参加者がいたため、グループ分けに時間がかかり、緊急問い合わせに対応できないなど失敗もありましたが、通話アプリの併用と担当者の増員で乗り越えました。こうした経験は同僚の大きな自信になったと思います。

現※在は第2期に入っています。前回、演習の回答時間が足らないという意見が寄せられたので、今回は演習問題の事前配布を行っています。また、説明項目の実際のイメージを掴み辛い参加者がいるという新たな問題もわかり、短い映像を使用する試みも始めています。

課題や問題の対応に追われる日々ですが、コロナ禍により非常に厳しい状況にあるペルーの中小零細企業の再起を図るという目標があります。それに向かい、企業の方々に相談する「場」の提供と改善手法を紹介し、方向性を見つけていただけるよう活動に取り組んでいきたいと思います。C

※ 執筆は11月中旬。

Rwanda Japan

ルワンダ・コーヒー栽培のリモート技術支援と、日本でのプロモーション

文 ＝ 鹿毛謙作（かげけんさく）さん（ルワンダ・コミュニティ開発・2018年度2次隊）

支援しているルワンダの若手農家たち。鹿毛さんは、農家のコーヒー収量増加や収入向上を目的に活動し、若手農家の支援のほかに、農協内のモデルファームづくり、農協の運営改善支援、観光地へのコーヒー豆の販路拡大、観光客向けコーヒーツアーなどマーケティング向上支援を行った

ルワンダでの活動およびリモート活動		
ルワンダでの活動	〈2018年11月～19年10月〉自己学習	ルワンダの自宅でコーヒーの苗木を育てる。
	〈19年5月～〉若手農家支援の準備	農協のモデルファームづくり、若手農家探し。
	〈19年10月16日〉農協支援	農協のモデルファームに300本の苗木を定植。
	〈19年11月7日〉若手農家支援	若手農家4人が農協に加入、苗木を配布し、各農家の畑に定植。
	〈20年3月19日〉若手農家支援	一時帰国前に3人の若手農家が農協に加入。
	〈20年3月20日〉若手農家支援	苗木の生育状況を確認。
リモート支援	〈20年4月〉若手農家支援	若手農家対象、農業技官による肥料散布方法のワークショップ。
	〈20年6月〉農協支援	農協のモデルファームの苗木の生育状況確認。
	〈20年7月〉農協、若手農家支援	若手農家の苗木の生育状況確認、マルチングや栽培の技術指導。
	〈20年11月〉農協、若手農家支援	農協が苗木を若手農家に配布。

2018年10月から20年3月中旬まで、ルワンダの西部県カロンギ郡にあるKOPAKAK農業協同組合で、コーヒー栽培に携わる活動をしていました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で一時帰国となりましたが、日本国内向けの活動と現地向けのリモート活動を行っています。

国内活動としては、ルワンダ・コーヒーのプロモーション活動に取り組んでいます。3月末の一時帰国前に任地にある農協の同僚に準備してもらったコーヒー豆を日本に持ち帰り、技術協力プロジェクト「コーヒーバリューチェーン強化プロジェクト」の専門家の協力を得て、日本国内の商社へサンプルを提供しました。コーヒー関係者にカッピング※1をしていただいた結果、青リンゴやハニーのような風味、レモンのような酸味を感じる特徴があり、カップスコア84・75点、スペシャリティコーヒー※2としての評価をいただきました。また任地のコーヒーを日本でも知ってもらうため、カフェの店舗で働くスタッフの方や自家焙煎のオーナーにサンプルを提供しました。

国内プロモーション活動のカッピングの様子

ルワンダへ向けたリモートでの活動は、若手農家の支援を中心に行っています。その必要性を感じたのは、農協が抱える課題の1つに後継者不足があると知ったときです。ルワンダにいる間に、コーヒー栽培に協力してくれる若手農家を探し、現在もリモートで支援。20年11月現在、7人の意欲的な若手農家が農協に加入しています。

19年12月に若手農家の畑に一緒に植えた苗木の生育状況を確認し、定期観察や情報共有をしています。彼らから写真を送ってもらい、苗木の様子や葉の色を見て、しっかりと肥料が与えられているか確認します。肥料の不足時は、農協の同僚に肥料の在庫を確認してもらい、彼らに供給するよう農業技官に働きかけています。一時帰国直後の4月には農業技官に協力してもらい、若手農家を招集して、肥料の撒き方の指導を行うなど、双方が連携して活動できるように努めました。また、通常ルワンダは7月から乾期を迎えるので、その間に土壌の乾燥防止や保水性を保つためのマルチングの技術指導や、直射日光を防ぐためバナナなどのシェードツリーを定植するようアドバイスもしました。

20年11月には「農協から150本のコーヒーの苗木が配布された」と若手農家から報告をもらい、農協と若手農家との連携がしっかりできていると感じています。

今後も継続的にルワンダの若手農家の支援やルワンダ・コーヒーの魅力を日本の消費者へ届けたいと考えています。コロナが収束した際には、日本の方をルワンダへ案内し、コーヒーの生産現場を見ていただくようなツアーの開催や、現地農協のカウンターパートを日本へ招待し、生産国と消費国の橋渡しをしたいと考えています。C

＊1 カッピング…香りや味の評価。
＊2 スペシャリティコーヒー…各国に存在するスペシャリティコーヒー協会が定める評価基準に合格したコーヒーのこと。甘さ、酸味の特徴などを評価し、100点中80点以上の評価をスペシャリティコーヒーと呼ぶ。

派遣国の横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。

タイ

Field 1

保健・医療

狩俣美紀（かりまたみき）さん

（作業療法士・2017年度2次隊）

PROFILE

1982年生まれ、沖縄県出身。リハビリの専門学校を卒業後、作業療法士として病院に勤務。2017年9月に青年海外協力隊員としてタイに赴任。19年9月に帰国。協力隊時代に新潟医療福祉大学大学院に入学し、現在までタイのリハビリについて研究。

活動概要

東部労災リハビリテーションセンター（ラヨーン県）とスラートターニー病院（スラートターニー県）で、主に以下の活動に従事。

- ●退院患者の住宅改修に関する技術支援
- ●病院の環境整備に関する技術支援
- ●作業療法に関する同僚への技術指導

「回復期リハビリ」が欠けているという課題への対策に尽力

異なる性格のリハビリを提供する2施設で活動した狩俣さん。メインの活動の1つとなったのは、障害者のリハビリの継続や安全な生活を可能にするために病院や家の改修を支援することだ。

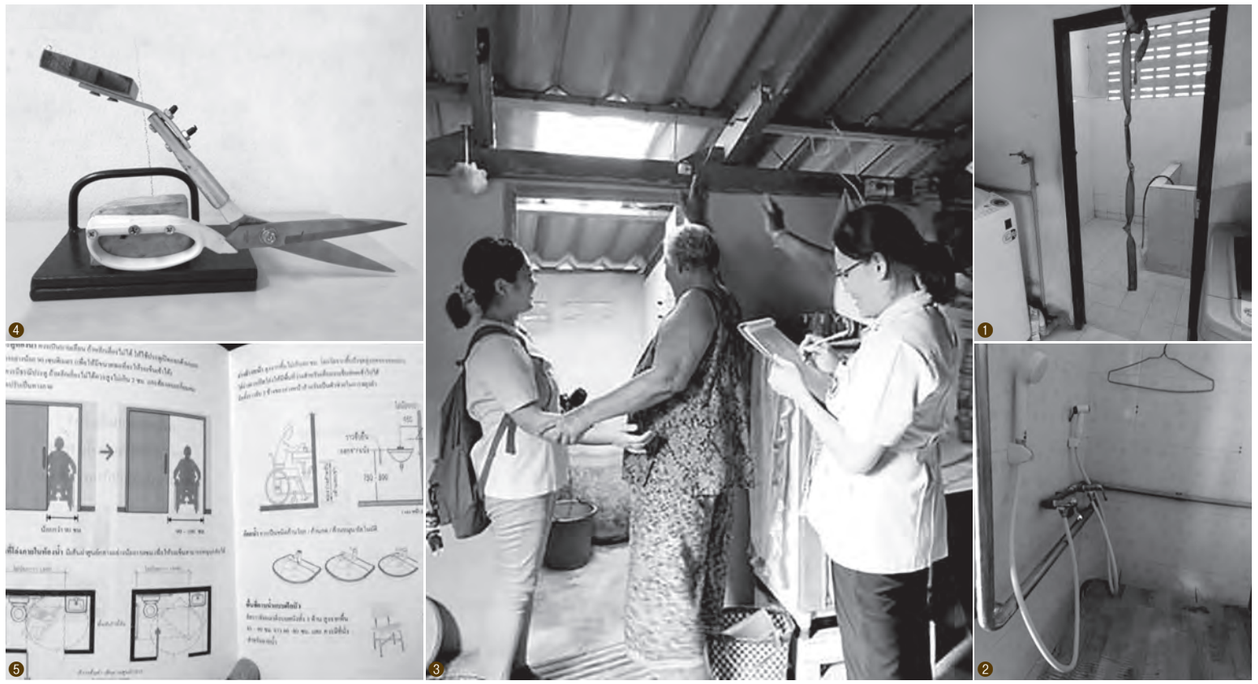
作業療法士隊員としてタイに派遣された狩俣さんは、2カ所の医療施設で約1年ずつ活動した。最初の配属先は、労働災害で怪我や病気を負った人に医療的リハビリや職業的リハビリを提供する「労災リハビリテーションセンター」の1つ（以下、「センター」）。工業が盛んなタイ東部のラヨーン県にある入所型施設だ。技術を伝える作業療法士が「センター」にいなくなってしまったことから移った2カ所目の配属先は、タイ南部のスラートターニー県にあるスラートターニー病院（以下、「病院」）。病床数が1000床にのぼる同県最大の総合病院である。

日本では以下のような3ステップでリハビリが行われるが、「センター」と「病院」はそれぞれ維持期リハビリと急性期リハビリを提供する位置付けの施設だった。

【急性期リハビリ】 病気やケガの治療直後や治療中に、症状の安定や寝たきりの防止を目的として行うリハビリ

【回復期リハビリ】 急性期リハビリの後に、低下した能力を獲得し、在宅生活への復帰を目的として行うリハビリ

【維持期リハビリ】 急性期リハビリと回復期リハビリで獲得された機能の維持を目的として行うリハビリ



❶❷下肢麻痺の患者の家の改修例　❶は改修前で、浴室の入り口に吊るした紐につかまって車椅子から浴室に移動していた　❷は台と手すりで移動を容易にした改修後　❸「病院」に配属されていた時期、デイケア施設の利用者の自宅を施設のスタッフと共に訪れ、生活のしやすさに関する家の評価を実施した（左端が狩俣さん）　❹「センター」に配属されていた時期にアイデアを紹介した自助具の例　❺郡立病院向けに作成した回復期リハビリのための環境整備のマニュアル

退院した患者の家の改修を支援

タイには、「急性期リハビリから回復期リハビリへの継続が欠けている」という課題があった。そのため「センター」に来る患者は、それ以前に回復期リハビリを受けられずに麻痺や筋力低下、関節可動域制限などの後遺症で日常生活に支障をきたしている人が多かった。そこで狩俣さんの「センター」における活動の1つとなったのは、「自助具」のアイデアを同僚たちに紹介することだ。自助具とは、不自由になった手や指などに装着し、食事などの日常生活動作を可能にする道具。現地では市販品の入手が難しかったため、現地で入手可能な材料で手づくりする方法を伝えた。

「センター」でのもう1つの活動は、車椅子や杖歩行で退院せざるを得なかった患者の自宅を、彼らが生活しやすいよう改修する方法の指導だ。「センター」に配属されていた約1年間で、4人の患者の自宅の改修を支援。日本では、回復期リハビリの退院時に自宅の評価を行い、リハビリ職が住宅改修にかかわるのが一般的である。しかし、配属先のリハビリ職は住宅改修の理解が十分ではなかったため、彼らと共に以下のような段取りで進め、技術の伝達を図った。

❶患者宅を訪問し、主に玄関、寝室、浴室、トイレについて生活の安全性を確認する。
❷「手すりの取り付け」「段差をなくす」「ドアの変更」など、改修のプランを作成。
❸現地の職人や「センター」の職業的リハビリの教員で改修を実施。
❹改修の1カ月後に患者宅を訪問し、問題点が解消されているかを再評価する。

住宅改修の対象となった患者からの評判は良好だった。例えば、以前は浴室の扉の上部から吊るしたロープを掴み、やっとの思いで車椅子から浴室に移動していた患者がいたが、浴室内に台と手すりを設置したことで、移動の負担が激減。一方、住宅改修に携わった同僚たちへの技術の伝達も進んだ。「どのような太さの手すりが持ちやすいか」など、患者にとって重要な改修の「着眼点」を理解してもらえるようになったのだ。

回復期リハビリの提供に向けて

「急性期リハビリから回復期リハビリへの継続が欠けている」という前述の課題に関して、2カ所目の配属先である「病院」では、その対策への動きが始まっていた。スラートターニー県内の19の郡にはそれぞれ郡立の病院があったが、「病院」が中心となり、それら郡立病院が急性期リハビリを終えた患者の入院を受け入れ、回復期リハビリの提供ができるようにするための支援を進めていたのだ。例えば、「病院」の医師や看護師、理学療法士、作業療法士が各郡立病院を回り、回復期リハビリで重点を置くべきことを伝えていた。狩俣さんはその巡回に同行。そこで見えてきたのは、いずれの郡立病院でも回復期リハビリを提供するために必要な「ハード面」の環境が整っていない実態だ。「トイレの入り口が狭く、車椅子で入れない」「しゃがんでする和式のトイレなので、障害者や高齢者には使えない」……。そうした問題に着眼できたのは、「センター」時代に患者の住宅の改修を経験していたからだった。

そうして狩俣さんは「病院」に配属されている時期、県内の郡立病院が回復期リハビリを提供できる環境を整えるための支援を活動の1つの柱とした。具体的には、ベッドから車椅子を使って安全にトイレに行くための環境をつくる方法を提案。院内でのハード面の環境を整えることが患者の自立につながり、同時に自宅での生活に戻った際に必要となる動きの訓練になることを、配属先のスタッフや家族に周知することを意図した取り組みだ。

一方で狩俣さんは、作業療法の訓練方法や自助具のアイデアについて同僚と共にマニュアルを編纂（へんさん）。現地の医療従事者がいつでも活用できるよう、インターネットのクラウドサービスにアップロードしたうえで、帰国の途に就いた。

任地ひと口メモ

〈スラートターニー県〉

県内の国立公園内にある観光名所、チャオラン湖。「タイの桂林」と呼ばれている

右：タイ南部で衣類に使われている伝統布。今でも高齢者が愛用するほか、正装服に仕立てて使われることもある
左：タイ南部の伝統料理「カノムチーン」。野菜を盛り付け、細麺にカレーをかけた料理

Field2
計画・行政

森見真弓（もりみ まゆみ）さん
（コンピュータ技術・2016年度3次隊）

PROFILE

1984年生まれ、埼玉県出身。創価大学大学院理工学研究科修士課程で超小型人工衛星を研究し、その開発・打ち上げを経験。修了後、無線機会社にシステムエンジニアとして勤務。2017年1月に青年海外協力隊員としてタイに赴任（現職参加）。19年1月に帰国し、復職。

活動概要

科学技術系人材の育成を目指す中高一貫校「プリンセス・チュラポーン・サイエンス・ハイスクール・ロッブリー校」（ロッブリー県）に配属され、主に以下の活動に従事。
●プログラミング授業の支援
●ハッカソンの企画・運営（他隊員との協働）

プログラミングへの生徒の興味を引き出すため ゲーム開発の大会を実施

中高一貫校でプログラミング授業の支援に取り組んだ森見さん。現地教員と二人三脚で授業を進める一方、生徒の興味を引き出すため、他のコンピュータ技術隊員たちと共に、ゲーム開発の技術やアイデアを競う大会を実施した。

森見さんが配属されたのは、科学技術系人材の育成を目指して理科と数学の教育に重点を置く公立の学校グループ「プリンセス・チュラポーン・サイエンス・ハイスクール」（以下、「チュラポーン」）の系列校。全国を12の学区に分け、それぞれに1校ずつ系列校を配置しているが、いずれも全寮制の中高一貫校で、授業料や生活費は無料だ。中学と高校のそれぞれで入試が行われ、理科と数学については全国平均をはるかに上回る学力を持つ生徒が集まってくる。森見さんの配属先は、タイ中部のロッブリー県にある系列校（以下、ロッブリー校）。求められていた役割は、ICT（情報通信技術）の授業を支援することだ。校内には、Windowsを搭載したデスクトップパソコンとノートパソコンを置く教室が1つずつと、Macintoshを搭載したデスクトップパソコンを置く教室が1つ備えられており、いずれも置かれているパソコンの台数は1クラスの人数以上。ICT授業の環境は申し分ないものだった。

「チュラポーン」の系列校は、1993年に開校した当初は通常の中等教育機関だった。タイの中等教育で科学技術系人材の育成を目指す公立校が初めて設立されたのは2000年。首都バンコクの近郊にある高校「マヒドン・ウィッタヤヌソン・スクール」（以下、マヒドン校）である。その後、地方でも同種の学校があったほうが良いということで、「チュラポーン」の系列校にマヒドン校の教育システムが移植された。「理科と数学のコマ数が多いカリキュラム」「1クラスは24人で、各学年は6クラス」などがその骨格である。

現地教員と二人三脚で授業を実施

森見さんが支援した授業の1つは、高校1年生で必修科目として行われる「プログラミング」の授業だ。その担当教員をカウンターパート（以下、CP）とし、主に知識の提供や教材の作成などによる支援を行った。

任期前半にCPとなったのは、10年近い教職経験を持つ女性教員（以下、Aさん）。森見さんは着任早々、プログラミング授業に関する困難に直面した。タイ教育省からの指示により、マヒドン校と「チュラポーン」のプログラミング授業で扱うプログラミング言語が、1970年代に登場した「C言語」から90年代に登場した「Python（パイソン）」に変更されたのだ。Aさんも森見さんもPythonを扱った経験は皆無だった。そこで、ICTの教員を対象に教育省が実施したPythonに関する研修会に2人で参加。そうして共に勉強を進めつつ、教育省がつくったPythonの指導用教材に散見された間違いを森見さんが訂正し、それを踏まえてAさんが講義を行うという役割分担で、プログラミングの授業を運営していった。

プログラミングの大会を開催

このように授業に関与するなかで森見さんが感じたのは、生徒たちのプログラミングに対する興味が薄いということだった。その問題を解決するきっかけとなったのは、「チュラポーン」の他の系列校に配属されていた4人のコンピュータ技術隊員たちとの協働である。着任してまもなくから、彼らとの情報交換の場で「生徒たちのプログラミングに対する興味をどう引き出すか」ということが課題として挙げられ、議論の対象となった。そのなかで対策として出た案が、「ハッカソン（hackathon）」という催しの開催だ。「ハッカソン」は、「プログラミングすること」を意味する「hack」と、「marathon（マラソン）」を組み合わせた造語。参加者が同じ時間に一斉にプログラミングを行い、その技術やアイデアを競う催しのことで、世界各地でICT教育の一環などとして実施されるようになっているものである。「チュラポーン」は2016年に日本の高等専門学校（高専）の設置・運営を行う国立高等専門学校機構と業務提携の覚書を交わしていた。そこで森見さんたちは、「チュラポーン」と高専の生徒が競い合う大会にしようと着想。そうして森見さんの任期の半ば、国をまたいだ次のようなステップのハッカソンが実現した。審査員は専門家などに依頼した。

❶「対象は高校1年生」「『Unity』というソフトウェアを使ったシューティングゲームを3人のチームで開発し、その技術やアイデアを競う」といった企画の骨子をまとめる。

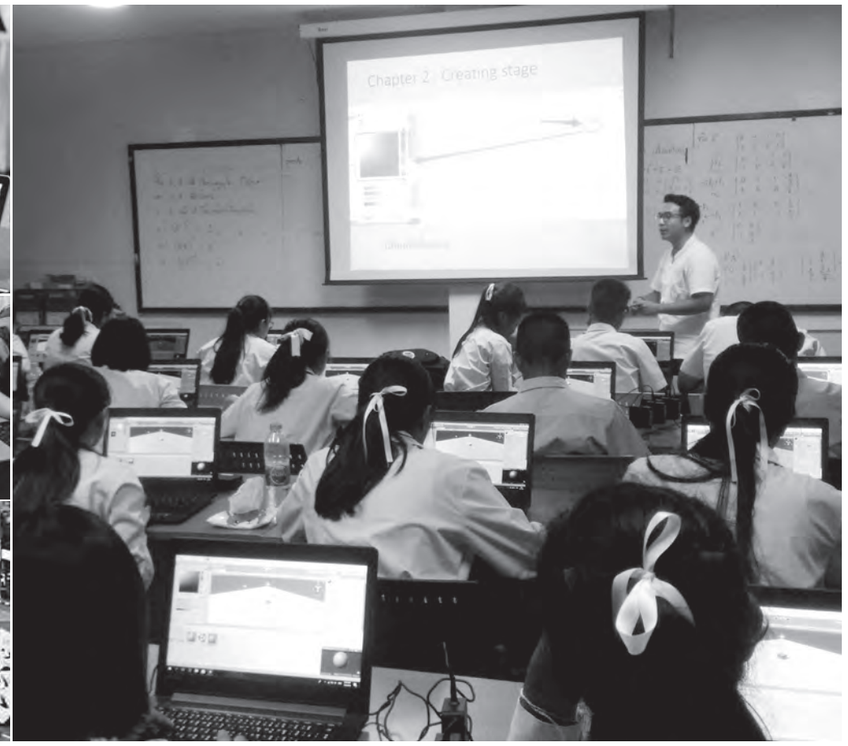
❷「チュラポーン」の各系列校が3人ずつ選出した代表生徒を、所属校が異なる3人の混成チームに再編し、予選を実施。

❸予選の上位3チームを日本に連れて行き、3校の高専がそれぞれ1つずつ出した代表チームと決勝を実施。

「大会をきっかけに、生徒たちが寝ずにゲームをやるようになってしまうのではないかと心配なんだ」。予選の時期からAさんに替わって森見さんの新たなCPとなった男性教員（以下、Bさん）は、ハッカソンの開催前にこう漏らしていた。ところが、当日の生徒たちの様子を見た彼は、「寝るのが惜しいくらいにゲーム開発にのめり込んでいた。こんなに真剣にプログラミングをしている姿を初めて見た」と感激。その後、彼の提案により、教員が内容を自由に決められる選択科目のプログラミング授業にUnityを使ったゲームの開発を導入。すると生徒たちは高い意欲を見せるようになり、授業以外の時間に森見さんやBさんにプログラミングに関する質問をする生徒も現れた。

一方、ハッカソンの効果を耳にした教育省は、「チュラポーン」のカリキュラムを変更し、必修科目のプログラミング授業にUnityの指導を導入。さらに、各系列校にUnityでゲームの開発をする部活を立ち上げるよう勧めたことから、6校でそれが実現した。森見さんの任期が終わる直前、コンピュータ技術隊員たちは2回目のハッカソンを実施。初回と同様、「チュラポーン」と高専の生徒たちが決勝を戦うものだ。このときは、教育省が生徒の渡航費などを負担してくれた。そうして、協力隊員が手を貸さなくてもハッカソンが開催される可能性が確認できたうえで、森見さんは帰国の途に就くことができた。 C

❶❷ハッカソンの決勝でゲームの開発に取り組む「チュラポーン」の代表生徒たち　❸プログラミング授業で生徒がつくったプログラムをチェックする森見さん　❹「チュラポーン」がその名を冠する王女の誕生日にロッブリー校で行われた記念祭で、王女の写真に敬意を表している生徒たち



コンピュータ技術隊員たちが作成したプレゼン資料を使いながら、プログラミング授業で新たに行うこととなったゲーム開発の指導をするBさん

任地ひとロメモ
〈ロッブリー県〉

クメール王朝時代の12～3世紀に建てられた寺院「プラーン・サームヨート」。野生の猿が多く集まる県の観光名所だ

森見さん（中央）と左の女性が身につけているのは、「ロッブリースタイル」と呼ばれる地域の伝統衣装。地元の人は祭りのときなどにこのスタイルになる。ゆったりとしたズボンとフリルが付いたシャツが基本だ

特集

コロナ禍による一時帰国を振り返る

新型コロナウイルスの感染拡大により、派遣中の協力隊員が一斉に一時帰国するという未曾有の事態となった2020年。彼らは一時帰国中、日本にいながら任地のためにできる活動に取り組んだり、日本国内の課題解決に取り組んだりと、ボランティアスピリットを発揮して「今、自分にできること」を自発的に探し、実践してきた。一方、再赴任が叶わないまま、志半ばで任期を終えることになった協力隊員も少なくない。本特集では、「一斉一時帰国」を経験した協力隊員たちに、体験してきたことやこうした状況への思い、今後の希望などを語り合ってもらった。

「志半ばでの任期終了」が持つ意味とは？

一時帰国をした後、再赴任が叶わないまま任期終了を迎えた3人に、一時帰国が決まってから現在までの流れや、「志半ばでの任期終了」が自身の協力隊経験にとって持つ意味についてお話しいただいた。

❸

西野尚之（にしのなおゆき）さん
（タンザニア・障害児・者支援・2018年度2次隊）

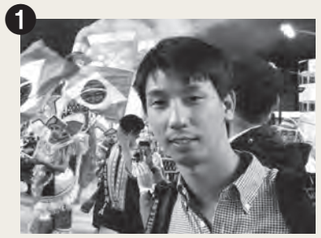
1993年生まれ、茨城県出身。大学卒業後、教員として聾学校に約2年間勤務。退職後の2018年10月、青年海外協力隊員としてタンザニアに赴任。聾学校に配属され、小学生への算数と理科の指導などに従事する。20年3月に一時帰国し、同年10月に任期終了。21年4月から県庁に福祉職で勤務する予定。

❷

富口由紀子（とみぐちゆきこ）さん
（マーシャル・栄養士・2018年度1次隊）

1987年生まれ、長崎県出身。大学院の修士課程を修了した後、栄養学の教員として短期大学に勤務。退職後の2018年7月、青年海外協力隊員としてマーシャルに赴任。病院に配属され、院内や地域、学校での栄養教育などに従事する。20年3月に一時帰国し、同年7月に任期終了。21年2月から管理栄養士として学校に勤務する予定。

❶



小島尚幸（こじまなおゆき）さん　（日系社会青年ボランティア／ブラジル・野球・2018年度1次隊）

1991年生まれ、東京都出身。大学卒業後、信用金庫に約4年間勤務。小学生のときから社会人になるまで野球を継続。退職後の2018年7月、日系社会青年ボランティアとしてブラジルに赴任。少年・少女への野球指導などに従事する。20年3月に一時帰国し、同年7月に任期終了。現在はJICA青年海外協力隊事務局に国内協力員として勤務。

※派遣名称は派遣当時のものです。

帰国前後の状況

編集部　新型コロナウイルスの感染拡大によって一時帰国することが決まってから、実際に帰国するまでの間、どのような状況だったかをお教えください。

小島　JICAブラジル事務所から「一時帰国することになった」との連絡を受けた時点で、私の隊次である2018年度1次隊は任期終了予定まで残り3カ月となっていたので、再赴任することなく任期終了となるのを前提に荷物の準備などをするよう指示があり、そうなることを覚悟しての帰国となりました。残念だったのは、感染のリスクを避けるため配属先の人や野球の教え子たちに直接会って別れのあいさつをすることができなかったことです。当時はまだブラジル国内の感染者は少なかったので、帰国することを配属先の人に電話で伝えると、「ここにいたほうが安全だろう」と言われ、「確かにそのとおりだ」と悔しく思いました。

富口　私が一時帰国の連絡を受けたのは、安全対策について情報共有を図るJICAマーシャル支所の会議に出席するため、協力隊員たちがみな首都に集まっている最中でした。任地が地方だった私は、帰国の準備などせずに首都に来ていたのですが、私の任地で感染の疑いがある人が出てしまったことから、その後、一度も任地に戻ることができないまま帰国せざるを得なくなりました。そうした無念さから、私は小島さんと同じ隊次ですが、当時は「再赴任の可能性はない」という現実を受け入れられず、お土産を買う気にもなれませんでした。マーシャルはその時期はまだ陽性が明らかになった人は1人もいなかったので、任地の人たちに首都から電話で帰国することを伝えると、やはり「こっちにいたほうが安全でしょう」と言われました。

西野　私がJICAタンザニア事務所から「一時帰国することになった」との知らせを受けたのは、タンザニア国内で初めて感染者が出た直後でした。私の配属先である全寮制の聾学校もすぐに閉鎖されることが決まり、子どもたちもそれぞれの自宅に帰ることになったのですが、私は2018年度2次隊でまだ任期が半年ほど残っていたので、子どもたちが集まった場では「日本に帰ることになったけれど、また戻ってくるよ」と伝えてしまいました。当時は呑気に再赴任できるものとばかり思っていたので、同僚や近所の人たちにも、やはり「また戻ってくるから」と軽いあいさつだけで済ませてしまいました。

編集部　2週間の健康観察期間を含め、帰国した直後はどのような過ごし方をされたのでしょうか

小島　自宅で健康観察期間を過ごしたのですが、その間はほとんど放心状態で、頭に浮かぶのは後ろ向きなことばかりでした。例えば、私が赴任していた当時、ブラジルでは10人を超える野球隊員が派遣されており、1カ月後にはみんなで集まってチームをつくり、現地の大人のチームと親善試合をしたり、子どもたちへの野球教室を開いたりする予定となっていました。野球隊員は普段、個別に活動しているため、子どもたちに「プレーヤー」としての姿を見せることができないので、それができるチャンスだとても楽しみにしていたのですが、それが叶わなかったことを思い起こしては、残念な気持ちに浸っていました。

富口　私がようやく「再赴任は無理だ」と冷静に判断できるようになったのは、

上：協力隊時代の小島さん（後列右から2人目）と、指導をした13～14歳の野球チーム。サンパウロ州サンパウロ市にある配属先の日系人団体「アニャンゲーラ日系クラブ」が運営するチームだ
右：JICA青年海外協力隊事務局に勤務する現在の小島さん

「『ブラジルを抜け出してきた』という申し訳なさがある」

成田空港に降り立ったときでした。健康観察期間を過ごした場所は私も自宅だったのですが、「何かしなければ」と思いつつ、心の整理がつかないため、何もできない状態でした。そこで、自然に「何かをやりたい」という気持ちになるまで待とうと思うようになり、しばらくは、ひたすらぼんやりと過ごしていました。

西野　私が健康観察期間を過ごした場所はJICA筑波で、2週間後に自宅に戻りました。私がようやく「再赴任は難しそうだ」と感じるようになったのは、帰国の約1カ月後です。きっかけは、「任期満了扱いで任期の終了を早める」という選択肢をJICAから提示されたことです。それまでの1カ月間は、再赴任できるものだと真剣に思っていたので、スワヒリ語と英語の勉強を続けたり、次の学期で教えることになっている算数の単元の予習をしたりと、再赴任に向けた自己研鑽に取り組んでいました。

任期終了後の進路

編集部　小島さんと富口さんが何も手に付かない状態を脱し、前向きになれたのは、帰国してどれくらい経ったころだったのでしょうか。

小島　私は1カ月ほど経ったころでした。協力隊員として日本でもできることをやったうえで任期の終わりを迎えようという気持ちになり、ビデオ通話で教え子たちに野球の指導をするといったことを始めました。任地はインターネットの環境が良かったのですが、日本とは時差が12時間あるため、対応はたいてい早朝でした。

富口　私が「そろそろ何かやろう」という意欲が湧いてきたのも、やはり帰国して1カ月ほど経ったころでした。そうして、作成に着手したものの、一時帰国で未完のままになっていた病院食の新たなレシピを完成させ、配属先の病院に送る活動などを進めるようになりました。

編集部　西野さんは帰国の約1カ月後に「再赴任は難しそうだ」と感じるようになったとのことでしたが、そこからの過ごし方はどう変わったのでしょうか。

西野　私は漠然と「来年から働き始めることができれば良いだろう」と考えていたので、任期終了を早める必要性がなく、予定の任期終了日である10月22日まで協力隊員の立場を継続する道を選びました。再赴任の可能性がなくなったわけではなかったので、それに向けた自己研鑽を続ける一方、次の進路について考えるようにもなりました。そうして、自分は社会的に弱い立場にある人を広く支援するような仕事がしたいのだということが見えてきたため、21年度に採用される地方公務員の採用試験への応募を進めたところ、任期終了の1カ月前に県庁の福祉職の内定をもらうことができました。

小島　私が次の進路について考え始めたのも、やはり帰国して1カ月ほど経って任地の子どもたちへのオンラインの指導を始めたころでした。私は派遣前も派遣中も任期終了後の仕事についてのビジョンを持っていなかったのですが、コロナ禍で協力隊員が一時帰国するという状況のなか、JICA事務所の企画調査員（ボランティア事業）が大変なご苦労をされているのを目の当たりにし、こうした方々に協力隊員の活動は支えられているのだとわかったことから、私も協力隊事業を支えるような仕事がしたいと思うようになっていました。そうして任期終了の1カ月後に就いたのが、青年海外協力隊事務局の国内協力員という今のポストです。

富口　私が就職活動を始めたのは、7月に任期が終了してからでした。私は派遣前から、協力隊を経験した後は栄養士として現場で働こうと考えていました。栄養士の経験がないのに教員を務めていることにコンプレックスがあったからです。そうして参加した協力隊で栄養指導に取り組むなか、「大人」の行動変容を引き出すのがいかに難しいかを痛感し、任期終了後は「子ども」の栄養への意識を育てるような仕事に就きたいと考えるようになりました。そうした方向性で就職活動を進めた結果、21年度から学校の管理栄養士として給食の管理や食育に携わることになりました。

「申し訳なさ」を糧に

編集部　今振り返って、任期の途中で一時帰国をし、そのまま任期終了を迎えざるを得なかったことは、ご自身の協力隊経験にどのような意味を持ったとお感じになっていますか。

小島　私が帰国した後にブラジルの感染者は爆発的に増えてしまい、「自分は任地の人たちを置いたまま、ブラジルから抜け出してきた」という申し訳ない気持ちを持つようになりました。そのため、いつかブラジルに戻って何かしらの貢献をするチャンスがあれば、どんなことであれ実践したいという思いが強まったと感じています。

富口　「自分だけ抜け出してきた」という申し訳なさは、私も感じています。私はマーシャルのために自分にできることをやりたいと思って赴任したわけですから、コロナ禍という大変な事態になったときこそ、現地にとどまり、現地の方々のために力になりたかった。それができなかった無念さや申し訳なさを持ったことによって、何事もなかった場合よりも、マーシャルや国際協力に対する思いがはるかに強い状態で任期終了を迎えることになったのだろうと思います。それを自分の今後の人生につなげていきたいです。国の間の行き来が解禁となったら、おそらくすぐにマーシャルに飛んで行き、私にできることをするだろうと思っています。また、長期的なつながりという面でも、協力隊時代に活動を共にした現地のNGOなどとの協働をしっかり続けていこうと考えています。

西野　お2人がお話しされたような申し訳なさは、私も感じています。一時帰国が決まってから実際に帰国するまでの間、現地の同僚たちによく「タンザニアは感染者がまだわずかで、日本はとても多くなっている。それなのになぜ帰国するのか？」と問われました。そういうときに「日本のほうが医療のレベルが高いので安全だから」などとは言えませんから、「確かにここにいたほうが安全だと思うけれど、日本が封鎖されてしまう可能性があるから仕方ないんだ」といった説明でお茶を濁すことしかできませんでした。そうして帰国したことを申し訳なく思う気持ちを何かしらの形で償いたいと、再赴任が叶わないことが見えてきたころから考えるようになりました。例えば、タンザニア産のキリマンジャロコーヒーを積極的に買う。「お金の支援をしても、持続的な開発にはつながらない」と言われますが、お金がなければ何もできないということは、赴任中に実感していることです。帰国して「クラウドファンディング」が盛んになっていることに驚いたのですが、タンザニアを支援するためにコーヒーの輸入を行っているようなNGOなどから積極的にコーヒーを買うことは、日本にいながらタンザニアに対してできる支援だろうと思っています。

上：配属先のイバイ病院（クワジェリン環礁イバイ地区）が管轄する地域の小学校で、栄養教育の授業を行う協力隊時代の富口さん
左：富口さんは任期終了後、就職活動がひと段落すると山小屋に2カ月間勤務。そこでようやく、新たな生活に向けた気持ちの切り替えができたと言う

「大変な事態だからこそ、現地にとどまり、力になりたかった」

「『なぜ日本に帰るのか』という質問に答えられなかった」

上：配属先であるムワンガ聴覚支援学校（キリマンジャロ州ムワンガ県）で、放課後にサッカーの指導をする協力隊時代の西野さん
右：西野さんは再就職の時期が2021年4月となったことから、現在は技能実習生が来日できなくなったために人手不足となっている地元茨城県の農家でアルバイトをしている

座談会 2

一時帰国中の協力隊員が取り組んだ活動

一時帰国中の立場にあるなかで、日本にいながら派遣国のためにできる活動や、日本国内の課題解決に取り組んだ方々に、活動の概要や、そこで得たものなどをお話しいただいた。

❸

宮田峻弥（みやたしゅんや）さん
（ガーナ・小学校教育・2018年度1次隊）

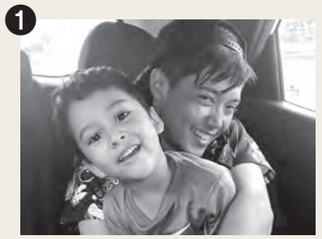
1995年生まれ、群馬県出身。大学卒業後の2018年6月、青年海外協力隊員としてガーナに赴任。地方にある2カ所の教育行政機関に配属され、管轄下の小・中学校における算数と理科の授業の支援などに従事する。20年3月に一時帰国し、同年6月に任期終了。現在は国際協力に関係する仕事に就くことを目標に就職活動中。

❷

近藤幸恵（こんどうゆきえ）さん
（カンボジア・看護師・2018年度2次隊）

1984年生まれ、新潟県出身。短期大学卒業後、看護師として総合病院に約13年間勤務。退職後の2018年10月、青年海外協力隊員としてカンボジアに赴任。病院に配属され、5S活動や院内感染防止対策の支援などに従事する。20年3月に一時帰国し、同年10月に任期終了。現在はカンボジアにかかわる仕事に就くことを目標に就職活動中。

❶



道願正歩（どうがんまさゆき）さん
（パナマ・作業療法士・2018年度2次隊）

1993年生まれ、高知県出身。大学卒業後、作業療法士としてリハビリ病院に約3年間勤務。退職後の2018年10月、青年海外協力隊員としてパナマに赴任。特別支援学校に配属され、発達障害を呈する児童への作業療法などに従事する。20年3月に一時帰国し、同年8月に任期短縮をして終了。現在は作業療法士として再びリハビリ病院に勤務。

高齢者対象の体操教室

編集部　みなさんは、新型コロナウイルスの感染拡大によって一時帰国されている間、日本にいながら派遣国のためにできる活動や、日本国内の課題解決に取り組まれたと伺っています。どのような経緯で、どのような活動に取り組まれたのかをご紹介ください。

道願　私が一時帰国中に取り組んだ活動の1つは、自宅がある地域にお住まいの高齢者の方々を対象に体操教室を開くことでした。帰国して1カ月ほど経ったころ、訪問リハビリや通所型の介護施設の運営がコロナ禍でストップしたため、それらを利用していた高齢者の方々の身体機能が低下しているという問題をニュースで知ったことが、教室を開いたきっかけです。参加してくださったのは10人くらいで、みな近所の知り合いの方々です。月に2回程度のペースで3カ月にわたって実施しました。感染拡大の防止方法は考えどころだったのですが、自宅には換気が十分にできる広めの部屋があったので、そこを会場とし、互いに距離を取って体を動かしていただきました。指導した体操は、テレビを見ながらでもできる簡単なものです。派遣前に作業療法士として集団を対象に体操指導を行った経験はなかったのですが、パナマでは農村部の住民を対象に腰痛予防の体操教室を開く機会があり、対象者の様子を見ながら無理をさせないよう気を付けるなど、その活動を通して身につけたノウハウも生かすことができました。教室の効果を尋ねるアンケートでは、「肩が軽くなった気がする」といった声をいただきました。

近藤　お1人で活動を企画し、実践されたバイタリティはすばらしいと思ったのですが、その原動力はどこにあったのでしょうか。

道願　私自身が体を動かす機会にもなるという点が大きかったと思います。私は帰国直後、とても混乱している状態だったため、健康観察期間をやり過ごすために帰国直前にパナマで買ったゲームばかりをして時間をつぶしていました。すると次第に体重が増え、だるさを感じるようになってきました。また、帰国の直前まであちこちに足を運んで活動に取り組んでいたため、いきなり自宅にこもる生活は相当強いストレスがありました。そこで「どうにかしなければ」と思い、毎日ラジオ体操をするようになったのですが、高齢者の健康問題を知ったのもそのころで、自分自身の健康のためにもなると思い、体操教室を始めました。

人手不足の農家の支援

編集部　宮田さんが一時帰国中に取り組まれた活動も、日本国内の課題解決に関するものだったと伺っています。

宮田　技能実習生がコロナ禍で来日できなくなり、人手不足になってしまった群馬県嬬恋村のキャベツ農家で、一時帰国中の協力隊員たちが収穫作業のお手伝いをさせていただく「嬬キャベ海外協力隊」と名付けられたプロジェクトに参加しました。一時帰国中の協力隊員に、再赴任後の活動や任期終了後の仕事に向けて「地域」について学ぶ場をつくるという狙いもあるプロジェクトで、企画したのは同県で地域づくりに取り組むNPO法人自然塾寺子屋でした。プロジェクトの実施期間は、キャベツの定植期と収穫期にあたる5月から11月までででした。順次加わっていく形で計12人の協力隊員が参加したのですが、私は出身が群馬県だったこともあり、スタートの時点で案内をいただき、そこから最後まで参加しました。群馬県で困っている方がいるなら力になりたい、農業の経験は皆無だったので学びも多いだろうといった理由からの参加でした。

編集部　プロジェクトの期間中はどのような生活を送ったのでしょうか。

宮田　嬬キャベ海外協力隊の隊員はみな同じホテルに宿泊していたのですが、収穫がピークとなる2カ月間ほどは、朝3時にホテルを出て、午前中いっぱい収穫作業を行い、2時間の休憩を挟んだ後にキャベツを詰める箱の組み立てを3時間行うというのが、1日のスケジュールでした。そうした生活を通じて、わずかながらも農業について知ることができ、人の役にも立てたというだけでもありがたかったのですが、お世話になった農家にはラオス人の技能実習生が2人いたので、彼らとかかわるなかで技能実習の制度や実情について知ることができたのも、私にとっては大きな学びでした。彼らは英語が話せなかったのですが、日本語の勉強をある程度してから日本に来ているため、翻訳機の力を借りながらであれば、私たち協力隊員とかなり込み入った話題についてもコミュニケーションをとることができました。

道願　技能実習生の方々の労働環境が悪いといった情報を耳にすることがありますが、宮田さんたちが一緒に働かれた技能実習生の方々は、「働く時間が長すぎる」といったネガティブなことを口にされたりしていましたか。

宮田　ほかの農家で働いている技能実習生の話なども聞いたことがあるのですが、技能実習生は受け入れ先の農家に

上：道願さんが一時帰国中のパナマ隊員たちと共に企画・実施したオンライン活動報告会の画面。発表した協力隊員の職種は、コミュニティ開発、小学校教育、理科教育、栄養士、作業療法士などさまざまだった
右：配属先である特別養護庁チトレ支部（エレラ県チトレ市）で、発達障害を呈する子どもに手と目の協調運動の訓練を行う協力隊時代の道願さん

「任地にいた1年半の間に得たものは確実にある」

よって満足度が大きく異なってくるそうです。私たちがお世話になった農家は非常に従業員思いの方だったため、一緒に働いた技能実習生たちは「もっと農業について学びたい」というポジティブな意欲を持ちながら作業に取り組んでいました。

派遣国に向けた支援

編集部　近藤さんは一時帰国中、日本にいながらでもできる派遣国への支援に取り組まれたと伺っています。

近藤　私は一時帰国しているカンボジア隊員たちと共に、カンボジアの方々に活用していただくための手洗いの啓発動画を作成しました。適切な手洗いのやり方をダンスによって伝えるもので、使っている言語はカンボジアの現地語であるクメール語です。看護師隊員たちで考えたダンスを、一時帰国したカンボジア隊員など約30人がそれぞれ個別に実演してビデオに収め、パソコンの扱いが得意な協力隊員が1本の動画に編集するといった役割分担でつくりました。私は帰国してしばらくは、気持ちがもやもやとし、前に進む意欲が湧かなかったので、自宅で心おきなくひきこもりの状態を楽しむことにしたのですが、そうした状態が1カ月も続くと、自然と「このまま何もしないでいるのはいけないだろう」と思うようになりました。そうして、一時帰国しているカンボジアの看護師隊員たちと「日本にいてもカンボジアのためにできることはないだろうか」と相談するなかで持ち上がったのが、この動画制作の企画でした。8月に完成し、YouTubeとJICAカンボジア事務所のFacebookページにアップロードしたところ、1カ月ほどの間に1万回以上閲覧していただくことができました。私の配属先病院の同僚たちは、アップロード後すぐにシェアをし、「良い啓発教材になると思う」といったコメントをくれました。

上：近藤さんが一時帰国中のカンボジア隊員たちと制作した手洗いの啓発動画（※）
左：任地の小学校で手洗いの啓発を行う協力隊時代の近藤さん

※

「一時帰国中の活動により任務を全うできたと思える」

道願　動画の制作に必要な隊員間のやりとりは、やはりオンラインで進めたのでしょうか。

近藤　そうです。初めての経験でしたが、話し合いもデータの共有もさほど困難を感じることはなく、オンラインでできることは意外に多いのだなと実感しました。

道願　私も一時帰国中、同じく一時帰国中のパナマ隊員たちと共にオンラインという手段を使った活動に取り組みました。一時帰国したパナマ隊員の有志6人が発表者となる、日本の方々に向けたオンライン活動報告会の開催です。活動報告をすることは、自分自身の活動を整理し、次に向けて気持ちを新たにする機会になり、活動報告会の様子を動画に収めてパナマの同僚たちに送れば、パナマと日本とのつながりを彼らに実感してもらうツールにもなるだろうとの考えから企画したものでした。JICAパナマ事務所にも広報などでご協力いただいた効果もあって、協力隊経験者、協力隊員の派遣前の職場の方、学生など、参加者は90人にのぼりました。報告会の準備もすべてオンラインで進めたので、やはり私もオンラインの可能性の大きさを感じました。

近藤　オンラインは確かに離れた場所にいる人たちが協働することを可能にしてくれますが、私は動画制作の活動を通じて、協働する人が多くなればなるほど、やはり作業を進めるスピードは遅くなってしまうのだということも実感しました。ダンス用の曲はカンボジアの人が好むタイプのものが良いと考え、カンボジアの音楽制作会社がつくった曲を使わせていただくことにしたのですが、そのやりとりに手こずったことで、完成までに3カ月ほどを要してしまいました。コロナ禍の最中ですから、手洗いの啓発などはできるだけ早く始めるべきだったので、その点に反省も残りました。刻々と状況が変わっていくなかでは、道願さんが取り組まれた体操教室のように、小規模であっても、必要なときにすぐ実践できる活動の意義は大きいと思います。

道願　小規模な活動には、運営に小回りが利く反面、効果は限定的になってしまうというデメリットもあるかと思います。例えば、私が開いた体操教室は対象者の人数も少ないですし、指導した体操をどれだけ継続していただけているかといったモニタリングにも手が回っていません。その点、近藤さんたちがつくられた動画は、カンボジアの音楽制作会社を巻き込んだことで、現地の方々にとってより興味が湧くような教材になっているはずです。社会活動には、規模の違いによってそれぞれメリットとデメリットがあるということなのだと思います。

コロナ禍の受け止め方

編集部　今振り返って、任期の途中で一時帰国をし、そのまま任期終了を迎えざるを得なかったことは、ご自身の協力隊経験にどのような意味を持ったとお感じになっていますか。

道願　もう少しパナマで活動がしたかったという「不完全燃焼感」があるため、おそらくパナマで2年間を過ごすことができた場合よりも、旅行などさまざまな形でパナマにかかわっていこうという意欲は高くなっただろうと感じています。その一方、パナマにいた1年半の間に協力隊員として得たものは確実にありました。その1つは、自分の知識や経験がまだ浅いことを自覚できたことです。私は任期終了の時期を早め、9月からリハビリ病院に再就職して作業療法士として働いているのですが、来年度は大学院に進学し、作業療法についての知識を深めることを考えています。

近藤　私は一時帰国した後も、隊員仲間と共にカンボジアのための活動に取り組むことができたので、自分なりに任務を全うできたという気持ちはあります。それでもやはり、予定どおりにあと半年ほど任地にいることができたらという心残りはあり、それによってまたカンボジアにかかわりたい、国際協力の仕事をしてみたいという気持ちは強くなりました。現在は、それが実現できるような新たな進路を模索しています。

宮田　私は派遣前、任期を終えたら教員になろうと考えていました。しかし、ガーナでの協力隊経験、さらには嬬キャベ海外協力隊で技能実習生とかかわった経験などから、日本と世界をつなぐような仕事をしたいという思いが強まりました。ただ、仕事として国際協力に携わるために必要な学歴や経験などが今の私には足りなすぎます。そこで、まずは今の自分でも就くことが可能な国際協力関連の職から経験の積み重ねをスタートさせたいと考えています。嬬キャベ海外協力隊で一緒に活動した協力隊員の1人が、「コロナ禍があったからこその出会いや経験を大切にしたいよね」と言っていました。考えてみれば、「農業」や「技能実習生」なども、コロナ禍がなければ知らないままになっていたかもしれません。そうした財産を生かした人生にしたいと思っています。

「コロナ禍があったからこそ得たものを生かしたい」

上：「嬬キャベ海外協力隊」（※）の一員としてキャベツの収穫に取り組む宮田さん
右：配属先であるガーナ教育サービスの東カセナ・ナンカナ郡事務所（アッパー・イースト州）が管轄する小学校で、日本文化紹介の授業を行った協力隊時代の宮田さん

※

隊員主体で授業を進めてしまい現地に根付く活動にできなかった

文＝菅原芽衣（すがわらめい）さん（セネガル・小学校教育・2017年度3次隊）

何から着手すればよいのかわからなかった赴任直後。活動先の小学校の先生と話していると、多くの先生から「図工の授業をやってほしい」と言われることが多かったため、図工を教えてみることにした。先生がそう言うのには理由があった。先生たちは学校で図工を学んだことがないため、図工のイメージが湧かず、指導書だけでは教えることが難しかったからだ。

授業前に、一緒に授業をする先生に手本となる作品を見せ、つくり方を教えた。言語が得意ではなかった私は、「言いたいことが伝わらないときは助けてほしい」と先生に頼むと、いつも快諾してくれた。実際に授業で先生は私が言いたいことを汲み取って、子どもたちに説明してくれた。最初は数クラスでの授業だったが、子どもたちとつくった作品を見て「私のクラスでもつくって」と声をかけてくれる先生が増え、ほぼ全クラスで先生と一緒に図工の授業を実施。作品を教室に展示する先生も多く、「教室が華やかになった」と喜んでくれた。

しかし、先生だけで図工の授業を行うことはなかった。私は「現地の先生には、私がいなくても授業ができるようになってもらいたい」と、赴任3カ月後から彼らだけで図工の授業ができる方法を探した。

図工の授業には、紙やハサミなど道具や材料が必要だが、学校ではそれらを用意できる資金がなく、各家庭でも用意が難しかった。最初のころは、授業前に私が必要なものを買って用意していた。「任地にあるものでできる授業にすれば、先生だけで行えるのではないか」と思い、なるべく任地で用意できるものを探した。例えば、子どもたちが食べるお菓子の袋や、テーラーからもらったハギレなどを利用するようにした。このときも、材料は私の活動後や週末に用意した。一緒に授業をすればいつか自発的に実施してくれると思ったからだ。

しかし、よく考えれば、材料の準備から一緒に始めなければ、彼らは図工の授業を行うことはできないのだ。その頃は、一緒に授業をしてもらいたいという気持ちの方が強く、それに気づけなかった。赴任1年後に、私は図工以外に算数や体育を教え始め、図工を行う回数が減ってくると、彼らから「図工をやろう」と声がかかることもなくなってしまった。C

セネガルの小学校で図工の授業を行う菅原さん

PROFILE

1992年生まれ、岩手県出身。2014年、盛岡大学文学部英語文化学科を卒業後、中学校に勤務。18年1月、青年海外協力隊員としてセネガルに赴任。20年1月に帰国。現在は、中学校に勤務。

活動概要

ンバケ県の小学校教員の質の向上を目指し、以下の活動を行った。

- 算数、図工の実施
- 体育の必要性を理解してもらうため、運動会の実施

“失敗”から学ぶ #187

事例整理

【本事例の状況（SWOT分析）】

	促進要因	阻害要因
内部	【隊員の良い面（S）】図工を教えることができる。	【隊員の悪い面（W）】自分だけで準備を進めてしまう。
外部	【環境の良い面（O）】教員は図工に関心がある。	【環境の悪い面（T）】学校で材料を用意できる資金がない。

活動開始

学校に資金がないため（T）、隊員が材料を準備してしまう（W）。

立てた目標

普段行われていない図工の授業を教員と一緒に行い、最終的には教員だけで図工の授業を定期的に行ってもらう。

実際の結果

最後まで隊員主体で授業を行い、教員が主体的に授業を行うことはなかった。

隊員自身の振り返り

いつも図工の授業の流れや授業に必要な材料を、私だけで考え、用意してしまっていました。私が図工の授業をする姿を見せたら、授業のイメージが掴め、彼らだけでもできるのではないかと考えていました。しかし、彼らは図工の授業をやってみたいというよりは、つくった作品を教室に飾り、教室を華やかにしたいという思いの方が強かったのかもしれません。教室を華やかにするために図工の授業を行っているのではないと伝え、「なぜ図工を行う必要があるか」を教員ひとりひとりに納得してもらってから授業を行うべきでした。また、彼らの希望は「やってほしい」であり、「できるようになりたい」ではないということに気づくべきだったと振り返って思います。

他隊員の分析

現地にとってのスタートライン

現地に根付く活動にできなくても、現地の方に図工を楽しませ、喜ばせたことはすばらしいと思います。教室に展示された図工の作品がきっかけで、将来生徒や先生が材料や道具を見つけ、図工を行うことがあるかもしれません。私も派遣中、事例のように活動を現地に残したいと考え、生徒に授業内容を考えてもらうというアプローチをしました。生徒が考えた授業を生徒自らが実施し、どのような授業になっても成功としてほめました。実際にその生徒のひとりから「将来先生になって、こういう授業をしたい」という話を聞き、継続の可能性を感じることができました。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・体育・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

体育科教員として運動会、スポーツ大会など現地であまり実施されていないスポーツイベントの普及に加え、町の人たちとの運動会や原爆展などのイベントを開催。授業ではイベント系種目に加え、生徒たちで考えた授業を、生徒たちが先生となり実施してもらった。

じっくり、ゆっくり、相手を知る

子どもたちは図工の授業を受けることができ、教室を彩ることができた、それだけでも成功だと思います。失敗を挙げるなら、現地教員の事情や状態を把握せずに期待したことです。現地教員も忙しく、隊員がやってくれるのなら任せるのも理解できます。教員が勤務時間外に教材を準備するというのは日本ぐらいだと思いますので、「準備段階から一緒に」という考えも現地に合っていないかもしれません。現地教員の内情を把握したうえで協力者を厳選していけば、活動を定着させてくれる教員に出会えたのではないかと思います。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・小学校教育・2017年度派遣
- 取り組んだ活動

現地の小学校にて、図工教育を中心に活動した。現地の協力者に対して図工授業を教授し、多くの小学校で彼主体の授業を行った。また、他隊員とコラボレーションして体育大会も開催した。

派遣人数は少ないものの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

希少職種図鑑

#G155

珠算

派遣中 ▶ 0人
累　計 ▶ 49人
分　類 ▶ 人的資源
活動例 ▶ 学校を巡回し児童や教師を対象に珠算指導のサポートを行う
類似職種 ▶ 小学校教育

※人数は、2020年11月30日現在。

トンガの小学校の子どもたちと先生、村山さん（後列右）。村山さんはトンガで全国そろばん大会も企画・運営した。大会では、参加者の300人の子どもたちが「テウテウ、カマタ！（よーい、はじめ！）」の掛け声で一斉にそろばんをはじく。「初めての大会でその音を聞いたときには感動しました」と村山さんは振り返る

PROFILE

1992年生まれ、新潟県出身。2015年、専修大学文学部日本語学科卒業後、地元で観光の仕事に従事。2016年10月、青少年活動の青年海外協力隊員（短期）としてウズベキスタンに赴任。17年10月、青年海外協力隊員（長期）としてトンガに赴任。19年10月に帰国。現在はウェブサイト制作にかかわりながら、パラレルキャリアを目指す。

活動概要

トンガの子どもたちの算数能力向上のため、以下の活動を行う。

- ●学校を巡回し、そろばん授業の補助
- ●毎年開催される全国そろばん大会の企画・運営
- ●教員養成校での指導補助
- ●教員のそろばん指導力向上のため、検定試験受験の推進

話
村山 茜（むらやま あかね）さん
（トンガ・2017年度2次隊）

Q メインの活動は？

私はトンガでそろばん教育のレベルアップを図るため、小学校を巡回し、教員に対する指導などを行いました。

トンガのそろばん教育は、日本の影響で約30年前から始められました。子どもたちの計算能力の向上はもちろん、両国の友好の印でもあります。

現地はそろばんが必須科目に入っているにもかかわらず、正しく指導している教員が少なく、教えられない教員も多いという問題点がありました。そこで特に注力したのは、「授業をしたいけど教えられない」「スキルに自信がない」という教員に対して、そろばん検定合格を目指す活動です。教員の元へ通って検定のための練習を週に2～3回実施。その結果、活動中に15人の教員が各自の目標級（2～9級）に合格することができました。

Q 活動の最大の困難は？

赴任前はそろばんが必須科目に入っているので、一定以上のレベルだろうと期待していました。しかし、赴任してみると、そろばん教育に積極的な教員は少なく、「自分は何のために来たんだろう」と自問自答するようになりました。また、私には「カリキュラムに沿って教える」ことが当たり前だったので、そうでない状況のなかでどう活動を進めたらよいのかわからなくなってしまいました。

Q どう解決しましたか？

時間の経過とともにトンガのゆったりとした文化や人柄を理解できるようになったことで、「焦らず目の前のできることをやろう」「小さいことを積み重ねよう」という考えを持てるようになりました。その後は、教員のレベルアップのために、教員が検定合格を目指すよう活動を開始。練習の中でそろばんの有用性に気づいたり、検定に合格することで自身のそろばんスキルに自信がついたりして、積極的に授業を行う教員が増えました。

Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。

トンガがそろばん教育を導入していること、現地の小学校で必須科目になっていることは日本であまり知られていませんが、最近ではテレビなどで取り上げられることも多くなってきました。日本から遠く離れた国でそろばんが普及しているということで話題性は高く、そうした活動にかかわれることはとてもやりがいがありました。

IT化が進んで自分の頭で考えなくても答えが出てしまう世の中だからこそ、自分の頭で素早く答えを導き出すことができるそろばんは、これからの時代大きな武器になると思います。そうしたそろばんを、これからまさに発展していく国で教えられることは、とても貴重だと思います！

#H115

医療機器

派遣中 ▶ 0人
累　計 ▶ 102人
分　類 ▶ 保健・医療
活動例 ▶ 医療施設における医療機器の保守・維持管理業務　など
類似職種 ▶ 病院運営管理、福祉用具　など

※人数は、2020年11月30日現在。

配属先の病院の院長、ドクターの方々や院内スタッフと日向さん（前列右から4人目）

PROFILE

1980年生まれ、東京都出身。神奈川大学理学部情報科学科を卒業。半導体設計企業に勤務後、医療画像診断装置のメンテナンス企業に勤務。メンテナンス業務と並行し、社内アプリケーションの作成なども行った。2018年2月、青年海外協力隊員としてミャンマーに赴任（民間連携ボランティア制度）。20年2月に帰国。現在は製薬、研究用装置のメンテナンス業務に従事している。

活動概要

ミャンマーのヤンゴン小児病院にて医療機器隊員として主に以下の活動を行う。

- ●医療機器（輸液ポンプ、CPAP装置、人工呼吸器、X線装置、保育器など）のトラブル・修理対応
- ●装置対応の記録の作成、装置リストの作成と管理
- ●各医療機器の操作方法、トラブル対応のマニュアル作成
- ●現地エンジニアへ基礎技術知識、修理対応の指導

話
日向泰史（ひなた やすし）さん
（ミャンマー・2017年度3次隊）

Q メインの活動は？

私はミャンマーのヤンゴン小児病院に配属され、医療機器隊員として活動しました。日本には臨床工学技士（英※名：Medical Engineerなど）と呼ばれる職種がありますが、ミャンマーはまだその職種が確立されていないため、同職種をつくる活動をしています。その過程で、配属先病院にも医療機器に対応する若手エンジニアが配属されていました。しかし、修理経験や道具も十分な状態ではないため、私が病院内の医療機器の管理、使用方法のサポート、修理とメンテナンスを行う院内のエンジニアとして活動をしました。

医療機器の修理とメンテナンスでは、ポータブルX線装置、人工呼吸器、心電モニター、保育装置などの修理やトラブル対応を行いました。また、管理では、在庫管理リストやメーカー修理必要時の連絡先リスト、不具合発生と対応の履歴リストの作成などを実施しました。

Q 活動での困難は？

ミャンマーの政府系病院では、多数のメーカーの医療機器が混在しており、自分の知らないメーカーや機種の装置も対応、修理しなければいけないことが多々ありました。そのような対応にマニュアルはなく、常に自ら考え行動していく力や手作業での修理技術が求められました。

Q どう対応しましたか？

不明な点は現地代理店のエンジニアと頻繁にコミュニケーションを取り、操作方法、各対応方法をしっかりと聞いて、それをまとめました。主要な装置に関しては資料を作成し、特に緊急性が求められる生命維持装置となる人工呼吸器は、マニュアルを作成することで、私自身も不具合時には即座に対応できるようにしていました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

現地で求められることは、故障して動かない物の修理で、「直してくれる人が来た」と期待されると思います。装置によっては、専門の部品を入手しないと修理できない物ももちろんありますが、一般的な電子部品やケーブルの修理で直ることもあります。現地では、そうした工具を使った経験、手作業の経験がとても必要となりました。私の活動では、エクセル関数やデータをまとめるIT知識も役立ったので、事前に学んでいくと良いと思います。

臨床工学技士の知識、修理エンジニアとしての経験と知識に加え、一般的な工学知識とIT知識、また語学力があれば、修理、管理、教育の活動をバランス良く行え、現地の人から信頼を得ることができると思います。また、それによって、現地に貢献できる活動もすることができると思います。

※ そのほかに、Biomedical EngineerやClinical Engineerとも呼ばれる。

JICA海外協力隊的プチテクガイド

簡単＆便利！ 活動・生活のパワーアップに役立つ

第112回

知っトク情報

改善の方法④

ナビゲーター＝武藤 正さん（シニア海外ボランティア／ベトナム・品質管理・生産性向上・2016年度4次隊）
※派遣名称は派遣当時のものです。

QC7つ道具の1つ「パレート図」

2020年11月号に引き続き、QC7つ道具（品質特性データを解析し、問題解決を行うための手法、QC＝Quality Control）の1つ**「パレート図」**という手法を使って改善を行う方法を紹介します。

パレート図とは、データを項目別に分けて大きな順に並べた図で、重要な項目を特定するための手法です。パレート図を使うと問題解決や改善を行うときに、重要な要因が明確になり、効果的に問題解決や改善を行うことができます。

■パレート図のつくり方

1 テーマ：製品苦情件数を少なくする

1 何を改善するか決める。

2 改善テーマに関する項目別データを収集する。

項目数はあまり多くしないことがポイントです。

3 データを整理するために、件数が多い**項目**から順に並べ、**件数、割合、累積割合**の表を作成。**その他**の項目は、データの大小にかかわらず最後に並べる。

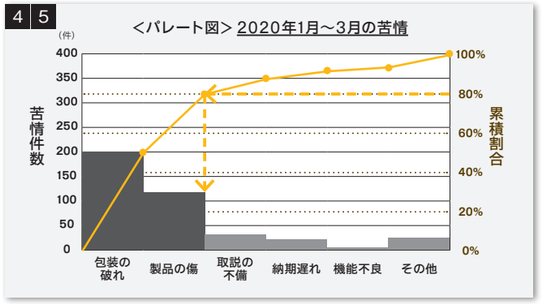
3 ＜収集データの整理＞ 2020年1月～3月の苦情

苦情項目	件数	割合	累積割合
包装の破れ	200	50%	50%
製品の傷	120	30%	80%
取説の不備	30	8%	88%
納期遅れ	20	5%	93%
機能不良	5	1%	94%
その他	25	6%	100%
合計	400	100%	

4 データの大きい順に**件数、項目**の棒グラフを作成する。

5 **累積割合**の折れ線グラフを追加する。累積割合は0～100パーセントの範囲で第2軸（右軸）に描く。

4 5 ＜パレート図＞ 2020年1月～3月の苦情



＜使い方＞累積割合が0～80パーセントの**項目**を選択し、その項目に関して改善を行う。上図の場合は、**包装の破れ**と**製品の傷**の苦情に関して改善を行えば、効果的な改善ができます。

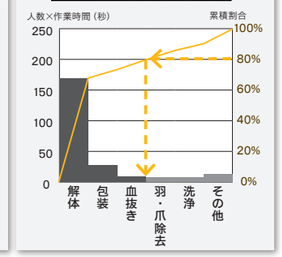
■武藤さんの事例から

私がベトナムで指導していた鶏肉加工会社では、鶏肉の加工に時間がかかるという課題がありました。そこで**「労務負荷を減らす」**目的で、鶏肉製造工程に関するパレート図を作成。それをもとに**解体**および**包装**工程を重要な労務削減工程として選択し、改善を行った結果、労務が減り、生産性が向上しました。

＜収集データの整理＞ 鶏肉加工労務負荷（1羽分）

加工工程	労務負荷 人数×作業時間（秒）	割合	累積割合
解体	170	66%	66%
包装	28	11%	77%
血抜き	10	4%	81%
羽・爪除去	8	3%	84%
洗浄	8	3%	87%
その他	35	13%	100%
合計	259	100%	

＜パレート図＞ 鶏肉加工労務負荷（1羽分）



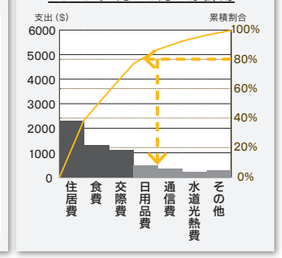
■品質管理・業務改善以外の改善にも使えるパレート図

パレート図は、家計簿の記録を使った生活費の削減や、生活時間のデータを取って時間の有効活用などにも使用することができます。例えば**「教育費捻出のため支出を減らす」**目的で、家計簿の記録を使ったパレート図を作成。パレート図をもとに**住居費、食費、交際費**を支出削減項目として選択し、優先的に改善を行うことで、教育費を捻出することができます。

＜収集データの整理＞ 2020年1月～3月の家計簿

支出項目	金額（$）	割合	累積割合
住居費	2280	38%	38%
食費	1260	21%	59%
交際費	1080	18%	77%
日用品費	480	8%	85%
通信費	360	6%	91%
水道光熱費	240	4%	95%
その他	300	5%	100%
合計	6000	100%	

＜パレート図＞ 2020年1月～3月の家計簿



パレート図を使うことで、集めたデータを活用することができます。今回の家計簿のように、食費が改善項目になったときは、食費だけのデータを取ってパレート図をつくると、より具体的な改善点が見えてきます。

活動に役立つアイデア

任地の素材を生かしたビジネスアイデア

ナビゲーター＝小郷智子さん
（ルワンダ・コミュニティ開発・2016年度4次隊）

ドライフルーツのつくり方

任地の素材を生かした新しいビジネスアイデアはないかと考えているなかで、ルワンダの新鮮な農作物と乾期の強烈な日差しを活用したドライフルーツを思いつきました。道具も手軽に手に入る物で実践できますし、また、干すことで栄養価が高まり、日持ちもするようになります。私は試作品を模索しながら現地の人々と製造方法などを検討している段階で任期終了となったのですが、皆さんの活動のヒントになればと思い、途中までの経過を紹介します。

1 材料と道具

- ●受け皿（できれば通気性の良い金網やザルがよい）
- ●カバー用のネット（現地で手に入る粗めのガーゼ、もしくは網）
- ●ヒモ
- ●果物、野菜
- ●ナイフ

2 つくり方

1 果物、野菜を薄切りにして、水気を切る。
試作品は、乾燥具合などを見るため、切ったままのものと、切って果汁を絞り出したものをつくった。

2 受け皿の上に果物、野菜を並べる。
皿ごとカバーを掛ける。

3 洗濯干場のような場所にロープで吊るし、日中は干す。カラッと乾燥するまで10日前後。夜は露で濡れるので、家の中に入れる方がベター。

3 留意点

①虫対策…一番の天敵は「虫」です。地面に近い場所だと虫（主に蟻）が集まりやすいです。果物が少量であれば洗濯ロープに吊るした方が虫は上がってきにくいです。

②通気性…もう1つの天敵は「カビ」。カバーは、虫除けを意識しつつ細かすぎる網目ではない方がいいです。試作時、虫除けのために網目の細かいカバーを掛けた際、天気がいい日に外に置いていたにもかかわらず3日ほどでカビが生えました。

③実施時期…国・地域にもよりますが、日差しが強く乾燥している乾期に実行するのがおすすめです。干している途中で果物に水分が付くとカビが生えたり傷んだりします。

④農作物の候補…私は、マンゴー、バナナ、パイナップルで試作しましたが、甘みの強い果物は虫が集まってきました。柑橘類の皮でドライピールをつくってみたところ、比較的虫が少なかったです。虫対策が難しい場合は、果物より甘みの少ない野菜（トマトやニンジンなど）で試すのもいいかもしれません。

4 情報入手先

YouTubeで探しました。世界中のさまざまなドライフルーツ作製動画があり、干し方や道具の種類も多様で参考になりました。現地の人に紹介するのにも便利でした。ドライフルーツのメリットや、世界中で需要がある点なども伝えると、「高級ホテルで販売できるかも！」「うまくいけば将来輸出ビジネスにつながるかも！」と、やや飛躍はするものの、モチベーションを高めることとその維持につながりました。

女性グループに講義をする小郷さん

5 工夫の余地

試行の後半では、現地の家具屋さんに依頼して専用干し台を作ってもらいました（が、完成前に帰国）。現地の事情が許すならば、簡単な干し台もつくると効率的かもしれません。

専用干し台の設計図

投稿募集！

活動や生活に役立つちょっとしたテクニックをお持ちの方は、『クロスロード』編集室まで。
crossroads@sojocv.or.jp

before
商社の海外駐在員

↓

after
自動車メーカーの海外営業

2019年8月、横浜市で開催されたアフリカ開発会議（TICAD7）に出展したスズキのブースに立つ古西さん

情熱は、人のために

パプアニューギニア・コミュニティ開発・2014年度2次隊
古西勇太（こにしゆうた）さん

「消費者（お客様）の立場になって価値ある製品を作ろう」を社是の第一に掲げる自動車メーカー「スズキ株式会社」。同社社員で、協力隊経験者の古西さんは、「社是を心で理解できるのは協力隊経験があったから」と話す。

「任地は舗装された道が少なく移動手段が限られており、現地の人は炎天下を裸足で歩いています。車があれば助かる命も目の当たりにしました。現在、スズキでどんな業務を担当しても、それがたどり着く地とお客様の顔が、私には見える。それが私の強みです」

人を幸せにする仕事

「昔から海外や国際関係への関心が高かった」と古西さんは話す。日本と異なる景色や人、未知なものにワクワクしたという。高校生のとき、経済、政治、すべてにおいて世界一だった米国に憧れた。日本の大学に在籍中、米国の大学に留学し、「世界を股にかけて働きたい」という気持ちを一層強くした。

卒業後は、自動車メーカーのグループ企業の商社に就職。海外勤務には「4年は下積みが必要」と言われたなか、2年半で中華人民共和国にある現地法人の駐在員となった。中国で自動車部品の材料調達の事業責任者として、「楽しく燃えて働いていた」という。

「26歳の若造が中国の社員と手を組んで、大手商社と戦い、結果を出す。達成感と充実感に満ちた5年半でした」

責務を全うできる力と情熱が自分にあると確認できた一方で、戦いの裏には痛みを持つ会社があることもわかっていた。「私の情熱は、社会の幸せのために使うべきだ」と考え、進む道を国際協力と定めた。中国駐在を終えて退職し、協力隊に参加した。

パプアニューギニアで、現地の収入向上や青少年育成などを目指して活動を始めた古西さん。当初はこれまでのスキルを最大限に生かし、現地の人にビジネスプランを提案し続けたが、全くの無関心。自助努力より支援に頼ろうとする彼らに憤りを感じるようになってしまう。活動の突破口となったのは「空手」だ。現在に至るまで空手とともに歩んできた古西さんは、赴任直後から空手指導を始め、道場を設立。そこで、学校に行かず職にも就かない若者が、変わっていく姿を見た。

「『努力すれば夢は実現できる』と私自身が空手から学びました。生徒たちもそれを空手から得ることができたのだと思います」

炎天下でも、雨の中でも休むことなく行われる稽古。しかし、厳しい稽古を乗り越えた達成感は必ず得られた。1年後には生徒の1人がインドネシアで開催された国際大会に出場。また、働くことで生活を変えられることを意識づけるため、あえて会費を義務付けた。すると、生徒たちは月の会費を納めるため、魚やココナツを売ってお金を稼ぐようになり、その後、貯めた会費で5人の生徒が日本遠征を叶えた。さらに、生徒の成長を見て雇用してくれる企業も現れたのだ。古西さんは、道場を生徒に任せ、任期を終了した。

その一方で、個人としての無力さと組織を通してこそ成し得る国際協力を実感する出来事もあった。日本でなら助かる命が失われていく現実を目の当たりにしたときだ。

「移動手段があれば、車があれば助かった命を考えたとき、前職が社会に与えた影響と役割を実感しました。どんな仕事でも社会の役に立つからこそ存在している。それに気づき、企業という組織を通した国際協力に挑戦しようと決めたのです」

パプアニューギニアで協力隊員として活動した古西さんと、現地で設立した空手道場の生徒たち

夢に挑戦する人生を生きる

帰国後、古西さんは新興国でビジネスをし、その国の発展に貢献する企業を探した。そのときに出会ったのがスズキ株式会社だ。同社は、自動車の現地生産による雇用の拡大と産業の育成、また車を持つことが難しい人々にも手の届く価格帯の車を開発、販売することで、国際貢献につながるビジネスをしている。同社と自身のビジョンが合致すると考えた古西さんは、スズキの門を叩き、同社に迎え入れられた。海外四輪営業本部に配属され、アフリカ地域を担当した後、現在は、スズキミャンマーモーター社に所属している。

ミャンマーにおける新車販売のシェアはスズキが5割を占めており、今後、新工場の建設も予定されているなど、ミャンマーは同社にとって非常に重要な国だ。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で古西さんのミャンマー渡航は少し後になるが、現在も日本から現地法人の事業計画取りまとめや経営管理、市場調査、商品企画立案、現地販売活動支援などを行っている。

ミャンマーで自動車のマーケットリーダーとしてさらなる躍進を目指すスズキ。その戦力の中核を担うという責務を負うことはやりがいであり、プレッシャーでもある。

「会社の利益を考えるだけではなく、ミャンマーのために、その国の人々のために、車をつくり、販売していく。その使命感があればどんなプレッシャーにも耐えられます」

「この仕事が必ず人々の笑顔につながると信じている」そう話す古西さん。笑顔にしたい人々の顔は、いつも古西さんの心にある。C

古西さんのプロフィール

スズキ株式会社

設　　立：1920年3月
住　　所：静岡県浜松市南区高塚町300
活動概要：四輪車・二輪車・船外機・電動車いす、産業機器の開発・製造・販売
従業員数：15,646人（2020年3月現在）
U R L：www.suzuki.co.jp

1981　福岡県出身。

2004　9月、早稲田大学商学部卒業（02年～03年米国LAWRENCE大学留学、国際関係学専攻）。

2005　4月、川崎汽船株式会社入社。

2014　10月、株式会社ホンダトレーディングに入社。08年5月～13年10月、本田貿易（中国）有限公司に駐在。

9月、青年海外協力隊に参加。パプアニューギニアで空手道場の建設と設立、それを通した青少年の育成と収入向上活動などに取り組む。

2016　9月、帰国。

2017　**4月、スズキ株式会社入社。**海外四輪営業本部でアフリカ、ミャンマー担当。20年4月よりスズキミャンマーモーター社に赴任。

before

JICA Volunteer

after

仕事に向けることができたエネルギーを会社だけではなく、直接的に社会に役立てることに使うべきだと考え、国際協力に従事することに決めた。現場を知るために協力隊に参加。

現地生産による雇用の拡大と産業の育成、また車を持つことが難しい人々に対しても手の届く範囲の車を社会に提供してきたスズキの歩みを知り、入社を決意。

帰国後

よもやま話

第22回 看護師隊員篇

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、OB・OGに語り合ってもらいます。

［座談会参加者］

A さん（女性）

【派遣前】
助産師（総合病院の産婦人科・内科）
【協力隊】
▶退職参加
▶・看護師
・アジア
・2015 年度派遣
▶町の地域保健センターに配属され、妊婦健診や分娩の支援などに従事
【現在】
助産師（助産院）

B さん（女性）

【派遣前】
看護師（小児専門病院の脳神経外科・神経内科）
【協力隊】
▶退職参加
▶・看護師
・アフリカ
・2016 年度派遣
▶地域中核病院に配属され、小児科の看護の質向上支援などに従事
【現在】
看護師（総合病院の脳神経外科・神経内科）

C さん（女性）

【派遣前】
看護師（大学病院の頭頸部外科・脳神経外科）
【協力隊】
▶退職参加
▶・看護師
・アジア
・2016 年度派遣
▶がん専門病院に配属され、看護の質向上支援などに従事
【現在】
看護師（がん専門病院のICU〈集中治療室〉）

A 派遣前は総合病院の産婦人科と内科の混合病棟で助産師として働いていました。協力隊は退職しての参加で、町の地域保健センターに配属され、妊婦健診や分娩の支援、自宅分娩を減らすための啓発などに取り組みました。帰国してまもなく現在の勤務先である助産院で助産師として働き始めました。

B 小児専門病院の脳神経外科と神経内科の混合病棟で看護師として働いた後、退職して協力隊に参加しました。協力隊では地域の中核病院に配属され、栄養失調児へのケアの質向上の支援や、配属先全体の業務改善の支援などに取り組みました。帰国して3カ月ほど経ったころから現在まで、総合病院に看護師として勤務しています。配属部署は脳神経外科と神経内科の混合病棟ですが、新型コロナウイルス感染症が流行し始めた後、その患者を受け入れる病棟へと改編されています。

C 派遣前は、大学病院の頭頸部外科と脳神経外科の混合病棟や、訪問看護ステーションで看護師として働いていました。退職して協力隊に参加し、がん専門の病院に配属されて看護の質向上の支援に取り組みました。帰国の半年後に、現在勤めるがん専門病院に看護師として再就職しました。派遣前に働いていた大学病院の病棟はがん患者が多かったため、帰国した時点でがん患者の看護に携わる経験が10年を超えていました。その専門性をより深めようということで選んだのが、現在の職場です。

B 私も帰国後の進路選択には協力隊経験が影響しているのですが、Cさんとは逆で「新たな専門性を身に付けよう」と思い、小児専門病院には再就職しませんでした。派遣国の医療は分業のルールが日本と異なるため、共に働いた現地の看護師たちは、日本では医師にしか認められていないような傷口の縫合なども

こなしていました。同じ看護師なのに持つスキルの幅が私よりずっと広いことに衝撃を受けたため、帰国後は成人の看護に携わろうと考えるようになりました。

A 派遣前に勤めていたような「病院」ではなく、「助産院」を帰国後の職場に選んだのは、やはりお2人と同様、協力隊経験がきっかけとなっています。協力隊時代の配属先は農村部にある医療施設で、医師がおらず、設備も最低限のものしかありませんでした。そうしたなかでも、多くの妊婦さんが無事に出産し、医師がいる病院に送らなければならないケースの割合はごくわずかでした。そこで妊婦さんたちの生活の様子を探ってみると、妊娠中も肉体労働を続けているなど、医療の介入がなくても無事に出産する力を保てるような過ごし方をしていることがわかりました。そうした経験から、医療の介入がなくても無事に出産できるようにするための手伝いを日本でしたいと思うようになり、医師がおらず、設備もシンプルな「助産院」への再就職を選びました。

外国人患者への対応

A 私が勤務する助産院には外国人の妊婦さんもいらっしゃるのですが、その対応はいつも私に任されています。いったん任されたら、妊娠中の健診から分娩まで、マンツーマンで伴走するような体制です。そのなかで、協力隊経験がなかったらできないような、彼女たちに寄り添う対応ができていると感じています。妊娠中や出産時に母国ではどのような過ごし方をするのかについて耳を傾け、そのうえでアドバイスをすることができているからです。例えば、妊婦健診の数値の捉え方は国によって異なります。日本では「重すぎる」とされる体

＊1 やさしい日本語…日本語を母語とする話者でなくても理解できる表現だけを使った日本語。

＊2 日本国際看護師…看護師を対象にした、外国人患者への安全、安心な医療の提供に必要な経験や知識を認定する制度。一般社団法人国際臨床医学会が運営するもので、一定の臨床経験や規定の研修の修了などが条件となっている。

重でも、それが標準レベルな国もあることを、協力隊経験によって知りました。それにより、それぞれの妊婦さんにとってどういう心がけが良いのかを一緒に考える姿勢を持つことができているため、「この人の話には耳を傾けよう」と思っていただけているのではと感じています。

B 私の今の配属部署は、新型コロナウイルス感染症の患者の受け入れをするようになってから外国人の患者さんも増え、その対応はやはり私に任されています。私が協力隊時代に使っていたのは英語ですが、英語が話せない患者さんも多く、通訳者抜きで対応しなければならない際は、翻訳アプリや「やさしい日本語」[*1]を駆使しています。しかし、外国人の患者さんへの対応で重要なのは、Aさんのお話にもあったように、「語学がどれだけ達者か」よりも、「どれだけ相手の状況を把握する姿勢を持っているか」であると感じています。例えば、体の調子が悪いときに、日本人を基準につくられた病院食を出しても、外国人は受け付けるのが難しい。「おかゆ」よりも「パン」が良いなど、元気になれる食事は育った環境によってそれぞれ異なるからです。そうした訴えに対して私は、「ここではこのメニューが決まりとなっています」とはねのけるのではなく、病院食をつくる部門に掛け合って、可能な限りで外国人患者には個別のメニューを設けてもらうよう努めています。病院と患者さんとの間のそうした橋渡しをしようと発想できるのは、やはり私自身が「外国人」として暮らした経験を持つからこそだろうと思います。

C 私は協力隊時代に怪我をして病院にかかったことがあります。そうした経験を通じて、「外国で病院にかかること」がどれだけ不安に満ちたものなのかがわかります。処方される薬の量が多いこと、医療費が前払い制であることなど、日本の病院とは異なる点が多かったからです。私の今の職場も外国人の患者さんがいらっしゃり、やはりお2人と同様、「あなたなら大丈夫でしょう」と対応を任されています。今後、外国人の患者さんはさらに増えていくはずなので、より適切な対応ができるよう力を磨いておきたいと考え、私は現在、「日本国際看護師[*2]」の認定を受けるための研修を受講しています。「在留資格」や「やさしい日本語」など、外国人の患者さんへの対応に必要な幅広い知識が学べる研修です。

また、今の職場は中国人の患者さんが多いこともあり、中国人の看護師が働いています。日本の大学院を修了している方で、日本語も話せ、日本で看護師の国家資格も取得しているのですが、それでも仕事で苦労をされています。難しい日本語の専門用語でまだわからないものもあるけれど、給料をもらって働いている立場では、同僚にいちいち教えてもらうわけにもいかないからです。なまじ日本語を流暢に話せるばかりに、対応の遅さを医師に厳しく咎められることもあります。それを個人的に打ち明けてくれたことから、私は職場と彼女の間に立ち、彼女が十分に力を発揮できるようフォローすることを心がけています。あらためて振り返ると、協力隊時代は「ボランティア」という立場であるがゆえに、語学力不足も大目に見てもらっていたのだなと感じています。

今後のビジョン

A 今後の仕事については、私はいずれ自ら助産院を開きたいと考えています。派遣前に病院で働いていたときは、患者さんとかかわるのは出産から退院までのわずかな期間だけでした。そのうえで参加した協力隊では、アンケート調査や健康教育のために地域に赴き、乳児を持つ女性たちの生活の様子に触れる機会があり、子育ては退院してからが大変なのだと実感しました。以来、いずれは地域で子育て中の方にも個別にケアを提供するような助産院を開業し、そこで助産師としての知識や技術を発揮してみたいと思うようになりました。それを実現することができるよう、行政の制度など子育てに関する地域の仕組みの勉強などもしていきたいと思っています。

B 私は協力隊経験によって、日常の決められた業務だけでなく、職場の課題解決に向けて自分にできることがあれば、積極的に取り組んでいこうという姿勢が強くなったと感じています。例えば最近、現在配属されている部署で、食事ができない患者さんへのより良い対応方法を研究する有志のグループが立ち上がりました。脳血管障害などによって食事ができない患者さんが多い部署だからです。私は協力隊時代、食事ができない栄養失調児のケアに携わってきたので、その経験が生かせるかもしれないと考え、グループに参加させてもらうことにしました。協力隊に参加する前なら、「まだ慣れていない小児科以外の部署にいるので、やめておこう」と考えていただろうと思います。そうした新しいことへのチャレンジは、これからも続けていきたいと思っています。

C 私は帰国後、「がんの看護」という専門性を高めていく道を選んだわけですが、今後も当面はその専門性をしっかり高めていきたいと思っています。私の派遣国も含め、途上国の経済が発展し、高齢化が進んでいけば、必ずがんの患者も増えていきます。そんな時代がやって来たときに、各国で看護師の育成にかかわることができればというのが、いつ実現するかわからないのですが、今の私の希望です。

Pick Up OB·OG会

「派遣国」や「職種」など、何かしらの共通項を持つ協力隊経験者によって構成するOB・OG会を、シリーズでご紹介していきます。

青年海外協力隊 岡山県OV会

会の目的

■会員相互の親睦を図る。
■JICA海外協力隊員として得た経験を生かし、多種多様な民間文化交流に協力し、その交流を通じ、広く世間一般に国際理解を促す。

岡山県の出身者、および同県に住んだことがある協力隊経験者で構成する当会が設立されたのは、協力隊が発足して10年あまり経った1970年代後半。協力隊経験を生かして多文化共生社会の実現に貢献することを目指す当会は、「地域」が縁でつながる協力隊経験者の団体であるがゆえ、地域住民と直接かかわる活動を中心に取り組んできた。その1つは、県内で年に1度開催される国際交流イベント「倉敷国際ふれあい広場」でのブースの出展。そのほか、派遣中の協力隊員の家族に協力隊事業に関する理解や安心を得てもらう「家族連絡会」の開催なども継続して行ってきた。

2020年11月には、コロナ禍で意に反して帰国が叶わず、就労の制限から経済的に困っている県内の留学生への支援を行った。コメの提供だ。農業を営む当会会員らの寄贈を受け、約300人の留学生に2キロずつ配布。協力隊経験を生かした地域社会への貢献が促進されるような社会環境の整備に民間の立場で取り組む「岡山県協力隊を育てる会」との協働である。

「私も協力隊時代、現地の方々に招かれ、食事を振舞っていただきました。今こそ、その恩返しの時だと感じています。1人の留学生に届けられるコメの量はわずかですが、コロナ禍で緊張を強いられる日々のなか、1人でも多くの留学生に少しでも温かい気持ちになってもらえたらと思い、取り組んだ活動です」（近藤代表）

2020年2月にJICAの地方支部と共催した「家族連絡会」の参加者たち

Outline

正式名称	青年海外協力隊岡山県OV会
設立時期	1977年ごろ
法人格	任意団体

Organization

代表者	近藤英生 （モロッコ・測量・1981年度3次隊）
会員数	約430人
入会資格	JICA海外協力隊の経験を有する、岡山県出身者または岡山県在住経験者
会費	2000円（夫婦は2人で3000円）／年

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	不定期
役員会の頻度	不定期
会員・役員間の主な連絡手段	メーリングリスト

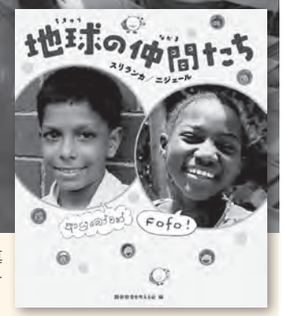
Contact

問い合わせ窓口	■ex.jocv.okayama@gmail.com （事務局長　藤原講平〈マレーシア・体育・2010年度2次隊〉宛） ■https://www.facebook.com/ov.okayama
情報発信の手段	■https://www.facebook.com/ov.okayama

開発教育を考える会

会の目的

さまざまな国で生きる子どもたちの暮らしやものの考え方などを、写真や子どもたち自身の言葉によって伝える教材の制作とその普及を行う。写真のソースは協力隊員が2年間の活動のなかで身近にいる子どもにスポットを当てたもの。単なる取材ではなく、住んで初めてわかる子どもと同じ視線が実現した。



上：「グローバルフェスタJAPAN」では継続してブースを出展（写真は2019年）　右：絵本『地球の仲間たち　～スリランカ／ニジェール～』（ひだまり舎、1800円〈税別〉）の表紙。続編を制作中

「地球に生きる子どもたちの現実や気持ちを伝えたい」との思いから代表の臼井さんが当会の活動を始めたのは、協力隊の任期を終えて6年経った1983年。主に学校教育にかかわるメンバーと写真教材『地球の仲間たち』を制作することから活動をスタートさせた。教材の写真はすべて協力隊員たちに提供を依頼。派遣中に知り合った現地の子どもたちの日常を撮影したものだ。背景についてのインタビューに基づく情報も載せており、短期滞在者の取材ではつくれない、子どもの暮らしそのものが見える教材となっている。

その後、この教材を使ったワークショップの参加者や、教材の翻訳者などからの意見をもとに、スライド形式の教材、フォトランゲージ教材（写真とその説明文からなるもの）、CD教材へと展開。いずれもコンセプトは、「地球のいろいろな場所に住む『仲間たち』が、お互いに顔の見える存在であると感じ合えること」を目指す教材だ。2019年には、子ども1人でも親子でも楽しめる同趣旨の絵本『地球の仲間たち～スリランカ／ニジェール～』を出版。QRコードで主人公が使う母語での語りを聴いたり、ワークシートをダウンロードして読者自身の日常をまとめ、絵本の主人公の日常と比較したりすることもできる。

『地球の仲間たち』の制作、取材や広報活動にかかわりたいと思う協力隊員やその経験者の方々のご参加を、ぜひお待ちしています」と、代表の臼井さんは呼びかけている。

Outline

正式名称	開発教育を考える会
設立時期	1983年12月
法人格	任意団体

Organization

代表者	臼井香里 （エルサルバドル・美術・1974年度2次隊後期）
会員数	5人
入会資格	青年海外協力隊に参加した後、教育にかかわってきた者
会費	なし

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年4月に開催
定例会の頻度	月1回（会員の都合に合わせて日程調整）
会員・役員間の主な連絡手段	メーリングリスト、オンライン会議

Contact

問い合わせ窓口	■shanri@marble.ocn.ne.jp ■046-256-0435 ■https://chikyu-nakama.com
情報発信の手段	■https://chikyu-nakama.com

先輩隊員たちが振り返る
就職活動の記録。

先輩隊員の
シューカツ記

今月の業種：
民間企業
（コンサルティング業）

就職先：
アイ・シー・ネット株式会社

事業概要：ODA コンサルティングや民間企業の海外展開支援、人材育成、スタートアップ支援などのコンサルティング事業

今月の先輩隊員：椿原健太郎（つばきはらけんたろう）さん

出身地：北海道
職種：コミュニティ開発
生まれた年：1990 年
派遣国：スーダン
任期終了時年齢：28 歳
隊次：2017 年度2 次隊

子どもの頃なりたかった職業：研究者（博士）

大学院・博士課程に進学し、研究者の道に進むつもりでしたが、協力隊の経験から実務家として国際協力にかかわりたいという思いが芽生え、「開発コンサルタント業」を選択しました。現在の業務では主に「新規事業開発」「ODA事業」「国内研修事業」に従事しています。
「アイ・シー・ネット株式会社」ウェブサイト
▶https://www.icnet.co.jp/

略　歴

- 2014年3月、京都大学農学部食料環境経済学科卒業。その後、英国のUniversity College London（UCL）MSc.Social Development Practiceで修士号を取得。
- 2017年10月、青年海外協力隊員としてスーダンに赴任。
- 2019年6月、任期終了（特別任期短縮）。
- 2019年10月、開発コンサルティング企業のアイ・シー・ネット株式会社に就職。

隊員時代の活動を教えてください

スーダンで観光省の同僚と観光促進プロジェクトについて話し合う椿原さん

コミュニティ開発隊員として地方都市カッサラの文化・メディア・観光省に配属され、観光発展戦略の策定や観光プロジェクトの立案・実施などに従事しました。2019年4月、軍事クーデターによる治安悪化に伴い、日本に避難一時帰国。待機期間2カ月を経て、6月に特別任期短縮という形で任期を終えることになりました。

このやり方はよかったと思えるところは？

志望企業は複数ありましたが（1社目で合格したため未受験）、あえて第一志望などは決めずに、就職活動に臨んだことです。選択肢を常に複数持つことで、面接でも過度に緊張することなく、自分の伝えたい思いをきちんと表現することができると思います。

協力隊経験を書類にどう書きましたか？

例えば、特別任期短縮で活動を終えてしまったやりきれない気持ちが、次の国際協力の舞台で活躍するための大きなモチベーションになっている、というように、自分のアピールポイント・強みを裏付けるエピソードとして、協力隊経験を盛り込めるように意識しました。

現在の就職先に決めた理由は？

開発コンサルティング企業でありながら、ODA事業に限らず、社会課題を解決するための新規事業開発・ビジネス支援・グローバル教育などにも積極的に取り組んでいて、とても面白い企業だと思ったからです。

仕事で協力隊経験が生かされているところは？

社員の約3～4割が協力隊経験者のため、自然と親近感が湧く先輩・同僚・後輩が多く、人間関係づくりの良いきっかけとなっています。

仕事のやりがいを教えてください

現在経営戦略部に所属し、社会課題解決を目指す新規事業開発プロジェクトが主な仕事ですが、自分のアイデアをどう事業計画に反映し、インパクトのある成果を生み出していくかを日々考え行動する機会があることに、とてもやりがいを感じています。ODAプロジェクトも兼務し、国際協力に貢献する様々な経験を積むことができるのもうれしいです。

今後の抱負をお願いします

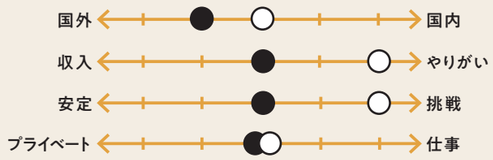
就職活動当時の「楽しみながら成長し続けたい」という気持ちを忘れずに、日々の仕事に励みたいと思います。

自己分析

強　み	知的好奇心、ロジカルシンキング、仕組みづくり
弱　み	感情表現が苦手（やる気がないと思われがち）
有する経験	協力隊での開発途上国経験

仕事選びの今昔。重視したのは？

協力隊参加前＝●　協力隊参加後＝○



仕事選びで特に大切にしたことは？

楽しみながら成長できる環境に身を置けるかどうか。

就活をとおして一番苦労したことは？

28歳でしたが企業などで働いた経験がなかったため、その弱点をどう他で補うか、戦略を練るのに苦労しました。結果的には、自分が課題に取り組む際に常に心がけている姿勢を3つ挙げ、学生時代、また協力隊活動のなかで、その姿勢を裏付ける「語れる」エピソードを準備することで、国際協力業界でも通用するマインドセットを持っていることをアピールしました。ちなみに、その3つの姿勢は、①安易な行動よりも、まずは可能な限り多くの情報を集め、客観的に現実を捉え、その本質を見極めること。②論理的な思考に基づいて、目標を達成するためにボトルネックになっている重要な課題を発見し、その解決策を見出すこと。③何よりも自分が向き合っている相手のニーズを重視すること、と書きました。

情報収集を開始

国連フォーラムメーリングリスト、国際キャリア総合情報「PARTNER」、就職情報プラットフォーム、一般社団法人海外コンサルタンツ協会（ECFA）、英国開発学勉強会（IDDP）、各企業のウェブサイト、各企業のSNS（特にFacebookページ）を利用。知り合いが全くいない企業を受けていたので、その企業の社風などの情報を得ることが難しかった。そのため「OpenWork」の口コミや各企業のSNSは、役に立った。国連フォーラムメーリングリストは、国際協力系の求人・インターン情報や、セミナー情報が毎日5～10通程度送られてくるので、とても便利。

GOOD WAY!
1つのリソースに偏らず、さまざまな情報源を持ったこと。メーリングリスト登録やSNSのフォローは一度行えば自動的に情報が送られてくるので、コストパフォーマンスがいいと思います。

シューカツ START
特別任期短縮で任期終了が決まった直後

GOOD WAY!
書類選考では書いている内容の論理性が求められるので、「○○だから、△△だ」というロジックがずれないように、文章を何度も推敲するよう心がけました。

応募開始/1次試験（書類）

応募書類は、履歴書、職務経歴書、応募用紙（志望動機800文字）。志望動機には、協力隊活動を含む過去の自分の経験と、「今後より一層成長したい」という強い意志を記載した。多くの応募者がいる書類選考では、自分の経験に基づいたできるだけオリジナリティのある内容を書くようにし、他の応募者との差別化を意識した。

任期終了
1カ月後

GOOD WAY!
「はい」か「いいえ」で答えられる質問でも、必ず理由をつけて回答しました。また、協力隊以外の職歴がなかったので、「将来伸びる」と面接官に印象付けられるように、理路整然と回答ができるように準備をしました。

2次試験/3次試験（1次面接/2次面接）

面接では、「志望動機」「なぜ開発コンサルティング企業か」「入社後にどのようなプロジェクトに従事したいか」などを聞かれた。聞かれたことだけを答えるのではなく、積極的に＋αで回答する姿勢を見せた。そのためには準備が必要で、協力隊での経験やその企業の事業内容、将来の夢などを面接の前にきちんと言語化できるように練習することが大事だと思う。

任期終了
2カ月～2カ月半後

シューカツREVIEW
面接官に入社後の成長性を感じさせたことが内定につながった。

応募した数…1社
書類選考通過…1社
内定した数…1社

内定

任期終了
2カ月半後

MESSAGE
コロナ禍で想定していた隊員活動を送れない、送れなかった方も多いと思いますが、そのやりきれない思いを今後のアクションへの大きなきっかけと捉えることが、就職活動においても大切な視点になると思います。

就職！
任期終了
3カ月後

JICA海外協力隊ウェブサイト「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
▶https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。
※カウンセラー／相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

ブラインドサッカーを通じて共生社会の実現を目指す

「ブラインドサッカーを通じて視覚障がい者と健常者が当たり前に混ざり合う社会の実現」を目指し、活動する団体「日本ブラインドサッカー協会」。協力隊でブラインドサッカーの魅力を知り、社会がつくり出す障がいを解決する一助になりたいと、同団体で協力隊経験者が働いている。

特定非営利活動法人
日本ブラインドサッカー協会
事業戦略部法人営業チーム
事業推進部
地域推進グループ
松尾雄大（まつおゆうだい）さん
（セネガル・小学校教育・2016年度2次隊）

ブラインドサッカーとはその名の通り「見えないサッカー」のこと。5人制で行われ、ゴールキーパー以外は視覚障がいのB1クラス（全盲から光[*1]覚まで）の選手が、アイマスクを着用して完全に視覚を閉じた状態でプレーする（国内大会では弱視者、晴眼者[*2]も出場可能）。ボールは転がると音が鳴る構造で、敵陣のゴール裏に「ガイド」が立ち、ゴールまでの距離を選手に伝えるなど、協力し合って行うスポーツだ。

「指示通りにプレーをするかどうかを最終的に決めるのは選手。ガイドの声をフェイントに使うこともあるんです」

そう説明してくれるのは隊員経験者の松尾雄大さん。隊員としてセネガルで活動中にブラインドサッカーと出会い、現在は日本ブラインドサッカー協会（以下、JBFA）で働いている。

「当会のビジョンは『ブラインドサッカーを通じて視覚障がい者と健常者が当たり前に混ざり合う社会の実現』。協力隊での経験でスポーツがその社会を実現する可能性を感じました」

松尾さんは、小学生からサッカーを始め、教員である両親の影響で教員を目指し、教育学部に進学した。協力隊に参加していた大学の友人を通じて興味を持ち、自身も協力隊に応募。セネガルで小学校教育の隊員として活動を始めた。

セネガルでは、現地教員の指導力向上を目的として授業の改善提案などを行い、それと並行して地元サッカーチームのコーチとしても活動した。活動中に、JICAが実施する「スポーツと開発」有識者派遣事業の一環として実施された「ブラインドサッカーを通じたダイバーシティ教育」が開催された。その際、隊員主催プログラムのリーダーを担当したことが人生を変えた。

「ブラインドサッカーなんて初耳。障がい者スポーツという単語は知っていましたが関心も興味もなく、障がい者は支援される存在、でもどう接したら良いのかわからない、というのが当時の私が障がい者に持つイメージでした」

ネットで情報を集め、セネガル国立盲学校にブラインドサッカーチームがあると知って訪問。そこには競技場を自由に駆け回る選手と、それを見る地域のサッカー少年の姿があった。

「『私と何も変わらない』と思いました。その後、アイマスクをして練習に参加しましたが、私は選手に全く敵わない。スポーツを通して選手に出会ったことで『障がい』への意識が完全に変わりました」

セネガルで松尾さんが設立したサッカーチームの子どもたちと隊員時代の松尾さん

＊1 光覚…光を感じられる。　＊2 晴眼者（せいがんしゃ）…視覚障がいのない人。

©JBFA

日本ブラインドサッカーが実施する「スポ育」で小学生にブラインドサッカーを体験してもらう様子。新型コロナウイスル感染症拡大の影響で、生活に制限があるからこそ子どもたちに体験をしてほしいという学校の先生からの要望もあるという

プログラム開催日には、日本から派遣されたJBFAの職員と共に活動。配属先の小学校でのブラインドサッカー体験会や交流戦などを行った。当時を振り返って松尾さんは次のように話す。

「ブラインドサッカーは選手である視覚障がい者と、キーパー[*1]、ガイド、監督の晴眼者が協力して行うもの。プログラムを通じて、同じように社会でもお互いが協力して生きていけると伝えることで、共生社会が実現できると感じたのです」

また、ブラインドサッカーによって選手たちと友達になった松尾さんは、彼らと話すなかで「働く場や社会参加の機会が少ない」という課題も知った。

「友達が困っていたら何かしたいという単純な思い。そして自分の障がいへの考え方を変えて『もらえた』からお返ししたいという思い。そのために自分は何ができるだろうかと考えました」

出した答えが、JBFAへの参加だ。障がいの課題をスポーツの力で解決できると知った松尾さんは、JBFAのビジョンである「当たり前に混ざり合う社会」の実現に参画できると思ったのだ。

障がいをつくる社会を変える

現在、松尾さんはJBFAの職員として、学校での体験型ダイバーシティ教育プログラム「スポーツを通した人材育成（スポ育）」の講師やブラインドサッカー大会の演出、法人営業などを担当している。スポ育では、日本国内の小・中・高校を視覚障がい当事者である選手と一緒に訪れ、児童・生徒たちにブラインドサッカーを体験してもらっている。JBFA全体では年間約600件を実施し、松尾さんも年間100件ほど担当。障がいを知る入り口の重要性を理解しているからこそ、体験会では選手に前面に出てもらい、児童・生徒とかかわる機会を大切にしている。

そして、ブラインドサッカーだけでなく障がい者スポーツを通じた社会貢献や国際協力での活用の広がりにも、今後注目してほしいと松尾さんは話す。

「障がいのある人だけではなく、誰もがかかわり合える、つながり合える場になるというのが障がい者スポーツ。異なる視点からスポーツの新しい活用方法を考えていくのも楽しいと思います。ブラインドサッカーであれば共生社会を体現した場を体験できるので、まずは皆さんも体験してください（※2）」

これまでの経験をつなげ、将来セネガルに基盤を置いた活動をしたいと、松尾さんは2020年に団体[*3]を設立した。

「セネガルの人と共に生活しながら、障がい者スポーツを活用して仲間を集め、障がい当事者が主体となって社会に参加できる活動をしていきたいです」 C

PROFILE●まつお・ゆうだい
1992年生まれ、福岡県出身。長崎大学教育学部を卒業後、2016年9月、青年海外協力隊員としてセネガルに赴任。小学校での算数の学力向上のため、教員向けに算数のモデル授業の映像教材制作などを行う。18年9月、帰国。その後、ミャンマーでテフ（聴覚障がい）サッカーのインターンを経て、19年から現職。

松尾さんが伝える「ブラインドサッカー」の魅力！

ブラインドサッカーの面白さは次の3つ。
①激しくぶつかり合いながら、自由に駆け回る選手たちの姿。
②選手と晴眼者（キーパー〈弱視者も可〉、監督、ガイド）とのコミュニケーション（声かけ）。
③観戦者は観戦中は静かに、ゴールが入ったときには思いっきり盛り上がる。
アイマスクをした選手たちが自由にピッチを駆け回り、ボールを追いかけ、相手選手やフェンスなどと激しくぶつかり合っている姿は見所のひとつ。そしてゴールが入ったときに観客も一緒になって喜ぶ瞬間は、障がい者スポーツでありながら障がいはなく、まさに共生社会を体現した場を感じられると思います。

セネガルのブラインドサッカーの選手と松尾さん。（現在、松尾さんは日本のチーム「パペレシアル品川」の選手としてプレーしている）

※1 キーパーは弱視者も可。　※2 詳細は日本ブラインドサッカー協会ウェブサイト「体験・プログラム」をご覧ください ▶https://www.b-soccer.jp/ex_program
※3 スポーツを通じてセネガルの障がいに挑み、共に障がいなき世界を目指す団体『WITH PEER』。

JICA海外協力隊の

つぶやき

お題 ▶ 台所

イラスト＝牧野良幸

今月の1枚

台所で目撃

私の任地は、年中常夏。年間を通してさまざまなフルーツが大きな実をつけていた。ステイ先のママはいつもミキサーでフルーツジュースをつくってくれた。マンゴー、スイカ、レモン、パイナップル……甘くておいしかったけど、お玉3杯ほどの砂糖を入れているのを目撃してからは1日1杯で我慢を心掛けた。

ペンネーム：暑いとカロリーが必要 さん（中南米・コミュニティ開発・2018年度派遣）

★love outdoors

近代化が進み、プロパンガスを用いたガス台が普及していますが、屋外で薪を使った調理も行われており、手づくりのカマドは煙が出にくい構造に工夫されています。現地の料理に欠かせない新鮮な食材のココナッツは、そのハスク（ココナッツの殻）が燃料になり、余すところはありません。屋外でつくる料理って、興奮しますよね。

ペンネーム：Mimi さん
（大洋州・栄養士・2018年度派遣）

★心が通う場所

訪れた家庭のキッチンで過ごすのが好きだった。その家のお母さんが主（あるじ）のその場所で、停電などの開発途上国ならではの不便さと格闘しながら、みんなと一緒に手を動かすと、相手の心が開いていくような気がしてうれしかった。日本の暮らしのなかで、キッチンに1人で立つと、あのときの不便さが恋しくなる。

ペンネーム：メルノワ さん
（アジア・コミュニティ開発・2018年度派遣）

★★スローフード

「昼飯食べていけ」と訪問先でお昼ごはんに誘われた。しばらく外にあるキッチンで待っていると畑で取れた野菜と鶏を持ってお父さんがひょっこり。火を起こして、井戸から水を汲んで、鶏をさばいて……もう日が暮れちゃうよ。キッチンの火で温まりながら食べた夕ご飯、おいしかったなー。

ペンネーム：黒猫のチムニャ さん
（アフリカ・コミュニティ開発・2018年度派遣）

募集中のお題
「ゲーム」「味付け」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきがイラストになるかも！？

駒ヶ根訓練所内に青年海外協力隊歴史展示コーナーを新設！

展示品について来場者に説明するJICA駒ヶ根のスタッフ

1965年の青年海外協力隊創設以来の歴史を振り返ることができる「青年海外協力隊歴史展示コーナー」を駒ヶ根訓練所内に新設しました。同コーナーには協力隊の歴史年表パネルをはじめ、初代隊員たちの派遣前訓練の様子をとらえた写真や、隊員たちがつくったアルバム、歴代の募集ポスター、周年事業の資料などを展示。隊員候補者はもとより、隊員OB·OGや一般の方にも広く紹介したいと考えています。施設訪問や同コーナーについては下記ウェブサイトをご覧ください。

▶JICA駒ヶ根「施設訪問」　※施設訪問は予約制です。
https://www.jica.go.jp/komagane/enterprise/kaihatsu/program.html

第16回JICA理事長表彰 受賞者·団体が決定

JICAでは、国際協力事業を通じて開発途上国の人材育成や社会発展に多大な貢献をされた個人・団体に対し、その功績をたたえ、「JICA理事長賞」を授与しています。16回目の今年度は、48個人·団体が表彰され、そのオンライン表彰式が2020年10月15日に開催されました。個人では、3人の隊員OBが受賞しました。

受賞したのは、10年以上にわたり、ブラジルやアルゼンチンで果樹栽培の技術指導に従事した浦田昌寛（うらたまさひろ）さん（日系社会シニア・ボランティア／ブラジル・農業・2003年度派遣）、長年にわたりペルーの陸上競技の振興と発展に大きく寄与した綿谷章（わたやあきら）さん（ペルー・陸上競技·1980年度1次隊）、20年以上にわたり、フィリピンやケニア、バングラデシュなどでの基礎教育分野のJICA事業に貢献した広島大学大学院人間社会科学研究科教授の馬場卓也（ばばたくや）さん（フィリピン・理数科教師・1984年度1次隊）です。

国際大学とJICA青年海外協力隊事務局が覚書を締結

オンラインでの署名式の様子

2020年9月30日、国際大学（IUJ）とJICAは、SDGsの達成等に向けて、世界が抱える開発課題の解決を牽引する将来のリーダーとなる国際人材の育成を目的に、覚書を締結しました。署名式はIUJの伊丹敬之（いたみひろゆき）学長とJICAの小林広幸（こばやしひろゆき）青年海外協力隊事務局長との間で、オンラインにて実施されました。IUJとJICAは15年に、国際貢献、学術研究及び教育の発展に寄与することを目的に覚書を締結しました。現在181人のJICA研修員が、IUJの学位課程で専門知識を付与する研修員受入プログラムに在籍しています。今回の覚書により、JICA海外協力隊員を対象に、IUJの修士号プログラムを通じた国際人材の育成を実施します。

訓練所の元モンゴル語語学講師が「秋の叙勲」で「旭日小綬章」を受章

令和2年度秋の叙勲で、二本松・駒ヶ根両訓練所で語学講師を勤めたダムバダルジャー・ナランツェツェグさんが、日本とモンゴルの相互理解を深め、協力関係を発展させることに大きな貢献をしたことが評価され、「旭日小綬章（きょくじつしょうじゅしょう）」を受章しました。

海外派遣看護師大募集！ 応募締切:1月20日

JICA事業を支える人材の派遣再開に向け、各国の医療事情を収集し万全な感染症対策を講じる必要があります。これらを実地で支援いただく看護師を大募集します。詳細は国際キャリア総合情報サイトPARTNERより「海外派遣・看護師募集」で検索ください。

問い合わせ先▶JICA人事部健康管理室
psghw@jica.go.jp

クロスロード

令和3年1月号［第57巻第1号 通巻663号］
発行日　令和3年1月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
竹橋合同ビル

『クロスロード』ウェブ版は
以下のアドレスからアクセスできます。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

ご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集！

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。

以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 日本でつくれる派遣国レシピをお寄せください。

eメール
一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

※本誌に掲載されている記事等の内容は執筆者の個人的見解であり、JICA の公式見解を示すものではありません。

クロスロード 2021年1月号

隊員めし おかわり！

日本でつくる現地の「めし」は活力の源

隊員's ポイント！
強火で一気に火を通し、イカとネギを炒めすぎないこと！

私の任地だったタイのラノーンは、漁師町でもあり、イカがたくさん獲れます。初めて食べたのは、ソンクラーン（タイの旧正月）の水かけ祭りの前日。同僚の家に泊まりに行き、夕食に同僚のお母さんがこの「パップラームック・ガップトンホーム（イカとネギの炒め物）」をつくってくれ、あまりにおいしくてすぐにつくり方を尋ねました。同僚のお父さんともよく話しましたが、彼は私の任期中に体調が悪化して亡くなりました。二度と戻らないあの日、たくさんのタイでの思い出がよみがえってくる料理のひとつです。

現在私は宮城県に住んでいますが、ここでも在留タイ人と交流する機会を持つことができています。タイ語が話せること、タイ料理がつくれること、それらが現在に生かされていることで、改めて協力隊で貴重な経験をしてきたのだと感じます。今後も国内外を問わず、また公私を問わず、タイの人々と交流を持ち続けていきたいです。

今月の料理人
玉田健一（たまだ けんいち）さん
（タイ・青少年活動・2017年度2次隊）
●活動内容：人身取引被害者のシェルターに派遣され、入所者向けのアクティビティの企画と実施に携わった。

新鮮なイカを肝ごと使ったタイ料理「イカとネギの炒め物」

材料（3人分）

イカ…400g
長ネギ…1.5本
ニンニク…2片
青唐辛子…5本（辛さによる）※
サラダ油…適量
オイスターソース…大さじ3～5
ナンプラー…小さじ2
砂糖…小さじ1
酒…50ml
水…50ml
※赤唐辛子でも代用可能。

つくり方

❶イカは軟骨を取り除き、内臓は取り出さずに約3センチ幅に切る（頭部は使わない）。
❷ニンニクは包丁の腹で押しつぶしてから、適当な大きさに切る。ネギは約1センチ幅の斜め切り。青唐辛子は輪切り。
❸フライパンにサラダ油とニンニクを入れ、ニンニクを少し炒める。
❹イカを入れて、酒を振りかけ、炒める。
❺イカにほぼ火が通ったらネギと唐辛子を入れ、オイスターソース、ナンプラー、砂糖を加え、ネギが少しシナっとするまで炒める。
❻水を入れて、ひと煮立ちさせたら、完成。

ひとくちメモ

今回、オイスターソースとナンプラーを合わせましたが、現地では「マッシュルームソイソース」をベースに味付けします。手に入ったときはお試しください。

❶目玉がついている部分が頭部（写真左上）、足の付け根にある「カラストンビ」と呼ばれる固い部分も取り除く。

❷全ての調味料とカットされた食材。切ったイカは一旦ザルに上げて余計な水分を落とした方がおいしくつくれる。

今月号の表紙
タイ

文=森見真弓（もりみ まゆみ）さん
（コンピュータ技術・2016年度3次隊）

科学技術系人材の育成を目指す中高一貫校に配属され、コンピュータプログラミングの指導に携わりました。任期中、配属先の系列校の生徒たちが日本に行き、日本の高等専門学校の生徒たちとPCゲームの開発を競う催しが実現。表紙写真は、審査結果を待つ間に両国の生徒たちがそれぞれ開発したゲームの出来栄えを一緒になって確認する様子です。「PCゲームは世界共通の言語」と実感したひとコマでした。

※森見さんの活動の詳細は8～9ページで紹介しています。

2021年1月1日発行（毎月1回1日発行）第57巻第1号 通巻663号
編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル